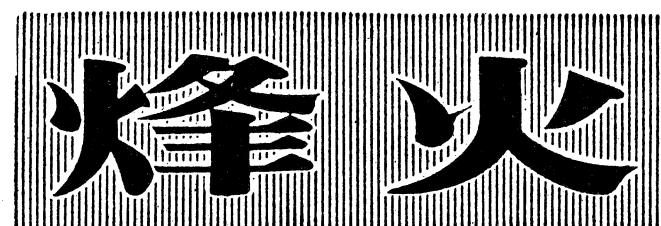


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1979年
1月1日
第320号
編集発行人 高木一夫
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 (電) (06) 371-3706
■ 東京 新宿北郵便局 私書箱 2018号
■ 沖縄 那覇東郵便局 私書箱 2016号

'79侵略反革命を内戦に転化する 鉄の列ーニン主義党建設へ

共産主義者同盟
(全国委員会)

死と破壊の二の武器を手にとりた
まえ戦争をおそれるセンチメンタルな
ぐち屋のいことは聞くな
労働者階級の解放のために火と鉄
で絶滅しなければならないものが
この世にはまだあまりにもたくさん
あるんのこつていて
そして、もし大衆のあいだに怒り
と絶望がたかまるなら、もし革命
的情勢が現存するなら、新しい組
織をつくり、自國の政府と自國の
ブルジョアジーに立ちかって、死と
破壊のかくも有効な道具をもつて
る準備をせよ

もちろん、それは容易なことでは
ない。
これは困難な準備行動を必要とする
ものは大きな犠牲を必要とする
それは、組織と闘争の新しい形態
であつて、それは、やはりまなび
とななければならぬ

—列ーニン—

序

直面する新たな革命の事業と 党建設上の課題

七九年、それは戦争と革命の時代的特色をくっきりと描きだしてしまはじまろうとしている。

七八年、『戦争とファシズム』をめぐる人民の自然発生的な巨大な流動と分解が開始された。有事立法を頂点とした一連の日本帝国主義の攻撃のなかに、人民はあきらかに『戦争とファシズム』の時代を予知した。しかし事態はそれのみではない。この人民の憤激の細流が、にもかかわらずことごとく社会帝国主義¹社共のもとに収束され、鎮静化させられんとし、『戦争とファシズム』の到来を予知するがゆえに、ますますもつて敵の陣営にからめとられてゆくという一見、転倒した事態——われわれは、この二つの事態をとらえてきることによって、たちあらわれた現実の根本を全面的にあきらかにすることができるのである。

革命的危機への移行の時期、慢性的な政府危機の発現、ブルジョア民主共和制のますますもつての形骸化、帝国主義と結合した巨大な社会帝国主義党によるプロレタリア支配の存在。これらを与件として登場する「中間連合政府の現実性」なるものは、資本主義の基礎²ブルジョア国家そのものは手をかけさせず、その「民主化」に帰結する体制内改良の幻惑であり、プロレタリアートの階級闘争をブルジョア生産関係の内部に封殺し、帝国主義の国際的国内的支配のもとへ解体せんとするものである。それが帝・社帝の結合した「中間連合政府攻撃」であることのゆえんは、超過利潤で買収することをもつて帝国主義が日和見主義を育成し、育成された社会帝国主義とともに、国際共産主義運動の分裂、とりわけ帝国主義国内の共産主義運動に反革命的に介入し、制圧をもくるむことにあり、もって、現実の帝国主義による侵略反革命と國家暴力機構への、プロレタリアート人民の屈服と動員をひきださんとすることにある。われわれはまた、次のことも知っている。帝国主義の侵略反革命とは、現代過渡期世界といふ階級闘争の一時代にわたる、とりわけ第二次帝国主義戦争以降の、帝・社帝の連合によって支えられた、民族解放—社会主義勢力の前進への圧殺に焦点をすえた一貫した戦争遂行体制にほかならないことを。

したがって、「中間連合政府」攻撃が激化する時にあたって革命的プロレタリアートのなすべき国際主義的任務とは、帝・社帝のかかる攻撃とのたたかいを通じて、日帝支配下の被抑圧民族の階級闘争と結合し、排外主義との死力をつくした闘争をもって、日本帝国主義の侵略反革命を内戦へと転化すべく壮大

なたたかいをきりひらくことであり、武装蜂起—プロレタリア独裁を準備する鉄のレーニン主義党³中央集権非合法党を、プロレタリアの階級闘争の奥深くに建設することである。

戦争とファシズムを めぐる流動と分解

現下の国際階級闘争は、あの七五年ベトナム完全解放にいたる戦後ヤルタ・ジュネーブ体制をうちやぶった民族解放—社会主義勢力の前進にしめされる国際階級闘争の局面から、

あきらかに次の新たな局面に移行したことを探している。七八年をつらぬく国際的な諸事象はこのことを端的に物語っている。世界資本主義の危機の深化のもとでの、市場再分割抗争がよりいっそうの激しさを加えた年、米帝とソ連社帝の世界支配再編をめぐる角逐が、いつそうの激しさを増した年、帝と社帝の重包囲のもとでの民族解放—社会主義勢力内部における路線闘争の激化の年、それが七八年であった。こうした国際階級闘争の新局面は、帝国主義の激化する侵略反革命との帝國主義下革命闘争の前進が、単に一国的見地からではなく、一国權力の防衛のみをもつてしてはもや突破しえない民族解放—社会主義勢力の苦闘が直面するところの、帝國主義下階級闘争との結合による世界プロレタリア独裁—社会主義への進撃という、国際階級闘争のトータルな見地⁴世界革命の見地からも要求されていることをわれわれにおしえている。

尖鋭な国際党派闘争のなかに、自国帝國主義の侵略反革命にたいする闘争は首尾一貫したものたりう。それは今日的には、「中間連合政府」攻撃との闘争を、権力問題をめぐる激しい党派闘争へと主体的に転化することによってのみなされる。

七九年、われわれの前には、かつてなかつたほどの激しさで、しかもますます深まりつたり、再編と解体をともなって進行する党派闘争がくりひろげられている。いかなる人民闘争も、もはやこのことを避けてすすむことはできなくなりつつある。そしてこのことは、諸党派の階級性⁵党派性をいやおうなく歴史の試練にさらす。右翼日和見主義者、そして急進民主主義者もまた、党派闘争と階級闘争指導をまったく対立する二元物としてとらえる点で、同様の基盤の上に立っている。

世界資本主義の危機の深まりに応じた、帝國主義下階級闘争の自然発生的昂揚⁶帝國主義下革命闘争の胎動は、激しい再編過程に突入し、これを革命に向かって真に牽引することができるのは、国際階級闘争の利益、国際党派闘争の前進の見地に立つもの以外にはないことが、ますます鮮明となつた。たとえ「帝国主義戦争反対」をかかげるものであつても、その階級的⁷党派的立場が厳しくふるいにかけられるのであり、一国的見地にもとづくあらゆる立場と実践が、かならずや帝と社帝の狡猾な支配の前に、国際階級闘争の利益を裏切り、屈服への道をたどることは必ず至る。

敵が、危機の突破にかけて『戦争とファシズム』に訴える時、それはあきらかに内戦への転化の、まさにその時でなければならない。それは何よりも、レーニン主義の蜂起の条件⁸計画としての武装蜂起発令の時でなければならぬ。したがって、われわれの武装蜂起

一プロレタリア独裁の準備は、はつきりと侵

略反革命との系統的な闘争と結合しておしすすめられなければならないのである。人民の

暴力機構の強大化・肥大化をとらえ、しかもその本質を個々の弾圧政策の強化としたうえで、これとの闘争がファシズムとの闘争であると強弁し、もつてファシズムの前への全面的な敗北を準備している。それは、「中間連合政府」攻撃へのありとあらゆる装いをまとつた解体、現下の侵略反革命の免罪、内戦をきりひらくべき武装蜂起—プロレタリア独裁の計画的準備の放棄、これこそその帰結である。

帝・社帝の結合と 国際党派闘争

帝・社帝との死闘を、「裏切り」や「無力性」一般の批判でなで切ることでここから逃亡し、「中間連合政府」のヘゲモニーあらそいにまで転落する。党派闘争を革命へむけた鮮明な階級指導へと結実させる。党の武装蜂起一党的プロレタリア独裁を組織せんとするもののみが、共産主義の実現へといたるプロレタリアートの階級闘争の指導の見地から、これにならすことができるのである。

党派闘争と階級指導との根本的な二元的对立のうえに「反革命カクマルせん滅」を、戦略主義的に位置付けてたたかわんとする革共同中核派がいる。「日本革命運動の不徹底性」をなげき、「日本プロレタリアートの排外主義的腐敗」をなげくこの急進民主主義者は「血債の思想の実践的貫徹→カクマルせん滅」と結合させることによって、それを突破するという。だが考えてもみよう。はたして日本革命の敗北、その負の遺産の構造は何であつたのだろうか。それははたして、現下の「

火 烽

中間連合政府」攻撃と無縁であるのだろうか。

われわれは、帝国主義下革命運動の歴史的敗北—三〇年代敗北のもつとも深い党的根源を、反ファシズム統一戦線にしめされるスターリン主義の社会帝国主義への転化の開始に求めることができる。ここにこそ、現在へとつらなる階級闘争の構造的敗北を突破し、階級闘争の構造的転換のためのたたかいがはつきりとしめされねばならない。いわゆる「社会ファシズム」を極左路線ととらえ、「反ファシズム統一戦線」—八〇度の転換とし、その徹底化を主張することのなかに、われわれは何を見なくてはならないのか。帝と社帝との歴史的結合を、それをもつてするプロレタリアートの全面的な排外主義的組織化、これである。「補 コミンテルン七回大会（一九三五年）は「ファシズムにたいする社会民主主義との統一戦線」をうちだした。この「反ファシズム統一戦線」は、五回大会を起源とする「社会ファシズム論」（『政治局面のいかんによってブルジョアジーは、ファシズム的方法を用いたり、あるいは社会民主主義との同盟という方法を用いたりするのだが社会民主主義が特に、資本主義にとって危機的な時に、公然とファシズム的な役割を演じることは珍しくない』の主張に典型的）から「戦術転換」であるとされ、「社会ファシズム論」極左路線、冒險主義、孤立戦術などと主張された。しかしわれわれは、コミンテルン五回大会以降のコミニテルン戦術が常に、党派闘争上の不徹底性と転落と結びついていることこそ、突破されなければならないといわねばならない。」問題はもはや明らかであろう。帝国主義との闘争を、日和見主義との闘争と首尾一貫して結合させてたたかうこと。世界プロ独立世界党建設のための社会帝国主義との国際党派闘争の遂行。この革命的指針なくして歴史的敗北を、真実突破することはできない。その現在の環こそ「中間連合政府」攻撃とのたたかいであると総括することができるのである。

したがって、「中間連合政府」攻撃とのたたかいを、社会帝国主義との路線闘争、権力問題をめぐる党派闘争としてプロレタリアート内部で容赦なくおしすすめ、もってプロレタリア大衆を革命へと訓練すること、すなわち、武装蜂起—プロレタリア独裁準備の目的意識的たたかいへと転化させねばならない。そしてこのたたかいのただなかから、民族解放—社会主義勢力の、党によるプロ独立の階級闘争を統合し、世界革命戦争—世界プロレタリア独裁へと進撃すべき世界党建設の礎が形成されるといえるのである。

では、このたたかいの前進の前に武装反革命として登場してくる社会帝国主義、とりわけソ連社帝の国際的地位にささえられた先进国社帝は、この「中間連合政府」をいったい何としてプロレタリアートに強要するのだろ

うか。イタリア・フランス・スペイン・日本

の各國共产党II社会帝国主義党は、その共通の革命戦略において次の点である。(イ)現在の

にのべている。「独占はひとたび形成されれば、その側面にしみこんでゆく……」と幾十億の金を自由にするようになると、絶対的な不可避性をもって、政治機構やその他の国家暴力機構の肥大化、共和制諸機構の形骸化は自剝化され、帝国主義戦争のもとでは、どんな民主的共和国においても軍事的專制を必然化させ、共和制を君主制と等しいものにかえてしまうのである。したがってこのよう

な歴史的状況のもとで、ブルジョア民主主義

の外被の破産に照應して、一政治形態としてのファシズムが生みだされてくるのであり、反動一般がファシズムではけつしてないのである。ファシズムに対する闘争は、敵の帝国主義戦争—その国家暴力機構の破壊に結合してたたかわれねばならず、ファシズムとの闘争を国内統治の反動化、粗暴化との闘争のみとしてと、え、これをもって敵の戦争とたたかうこと。さあ強弁することは、かつても、そしてこんなにちにおいても、血の帝国主義戦争のもとへのプロレタリアートの躊躇んを意味するのである。

(第一) 中間連合政府を利用しよう。下からの統一戦線をもって参加しよう。そうすれば二重権力状況が生みだされ、プロレタリアートの権力が誕生する」という。この反スターロツキズムのあいも変わらぬ主張は、もはや「中間連合政府」攻撃の水先案内人のそれとなつた。

右翼日和見主義者たちはこれに迎合し、「内戦をともなわない、あらゆる形態の階級闘争の道」と。

「中間連合政府」を利用して、下からの統一戦線をもって参加しよう。そうすれば二重権力状況が生みだされ、プロレタリアートの権力が誕生する」という。この反スターロツキズムのあいも変わらぬ主張は、もはや「中間連合政府」攻撃の水先案内人のそれとなつた。

ファシズムとの闘争の今日的基軸

有事立法を頂点とした日帝の侵略反革命の一戦線をもって参加しよう。そうすれば二重権力状況が生みだされ、プロレタリアートの権力が誕生する」という。この反スターロツキズムのあいも変わらぬ主張は、もはや「中間連合政府」攻撃の水先案内人のそれとなつた。

フアン・ソリナは、「他帝国主義列強の侵略に対する経済的解放」「資本から解放された理想国家の樹立」であり、それはその出発点において没落しつつある小ブルジョアジー、労働貴族などを実体的推進力として、現政権への批判勢力として登場する。そしてそれは「革命運動」としての外觀をともなつて、もはや改良によつては活路を見いだせず何らかの革命的変革を要求しはじめるプロレタリアートを巧妙にとらえ、階級深部からの独自の反革命暴力を有す社会運動としてたちあらわれるのである。社会排外主義・社会帝国主義彼党へのプロレタリアートの広範な絶望・離反、これらなのである。

フアン・ソリナは、「他帝国主義の唯一の延命方向たる侵略的反革命の強化、プロレタリアートの排外主義的組織化、このための共産主義運動の排外主義的反革命制圧、これとわかつがたく結合してたちあらわれるのである。したがつてわれわれの任務はさらに鮮明となる。敵がファシズムをもつて危機の反革命突破をなさんとする反革命決起の時は、帝・社帝の「中間連合政府」攻撃とのたたかいを要として、侵略権力奪取のためのたたかいが準備され、勝利をおさめるべきまさにその時でなければなら

量の質への転化」としてのそれなのである。レーニンはその著『帝国主義論』で次のように述べている。「独占はひとたび形成されれば、その側面にしみこんでゆく……」と

する反革命決起の時は、帝・社帝の「中間連合政府」攻撃とのたたかいを要として、侵略

権力奪取のためのたたかいが準備され、勝利

をおさめるべきまさにその時でなければなら

ない。そしてこのようにすることによってのみ、帝国主義下のプロレタリアートの武装蜂起は、その国際主義的・政治的性格を鮮明にしうるであろう。

プロレタリアート内部における革命の組織

既にのべてきたわれわれの今日的たたかいは、その政治・組織上の任務として、プロレタリアート内部における革命党としつかりと結びついた「革命の伝導路」の建設に、徹頭徹尾、物質化されねばならない。

われわれに、はつきりしていることが二つある。ひとつは、この「革命の伝導路」の構築が、革命的政治闘争の前進へと結実されねばならないということである。帝国主義のこんにちの攻撃は、一方における侵略反革命の強化、他方における搾取と収奪、反動と差別分断支配の強化としてあり、両者にたいする人民のたたかいは、國家暴力機構のいっそうの前面化によって、自然発生的に結合されはじめている。これを目的意識的な結合へと發展させるために、いまこそ革命党によって鮮明な政治攻防環が、プロレタリアートの階級闘争の自然発生的な戦場の内部で、創出されねばならない。そして、人民の無数の自然発生的決起が系統的に指導され、領導されつづけられねばならない。

ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊と革命的危機への移行

七五年ベトナム完全解放を大きな画期とした戦後ヤルタ・ジュネーブ体制とは、ソ連共産党二〇回大会をもって完成するスターリン主義の社會帝国主義への転化・帝国主義の國際党派闘争への介入、全面的制圧によって、そして、戦勝帝国主義・アメリカ帝国主義の一元的支配、そのもとでの侵略反革命体制・侵略反革命同盟の形成として、そして三つにはこれを部分的に突破して成長をとげた民族解放・社会主義勢力の一旦の封殺をもって、四五五年ヤルタ協定と五四年ジュネーブ協定としてその成立をとげた。そして、このような戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の政治的上部構造に照合して、その経済的基礎・各資本主義の戦後復興がおし進められたのである。それは日帝において、最も顕著である。日帝の戦後復興は、IMF・GATT体制という国際通貨体制によるドルの圧倒的優位を基盤に

さしての政治戦略

七五年ベトナム完全解放を大きな画期とした戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊局面は、以降三年余をへてその内部から革命的危機への移行の諸特徴を成熟させつづける。

けられねばならない。それは「左」右の自然発生性への拝跪主義とたたかい、権力奪取のための闘争を革命的政治闘争として、こんにちから絶ゆむことなく、一步一步、たたかいてゆくことによってはじめて、目的意識的なものたりうることもまた明白である。

いまひとつは、この「革命の伝導路」建設のたたかいが、主体的にはプロレタリアートの最高の階級的団結の質と形たるレーニン主義の鉄の党組織、その基本組織たる中央委員会・細胞を、武装蜂起・プロレタリア独裁の指令部の質へと変革するたたかいと、結合されねばならないということである。このたたかいは、プロレタリア階級の深部・工場の内部、人民闘争のあらゆる戦場において目的意識的に形成されねばならない。われわれはこうすることによって、「革命の伝導路」建設のたたかいを、こんにちからする蜂起とプロ独の機関・ソビエトと、革命の軍隊・赤軍の中核を建設してゆくための準備に、はつきりと焦点をつけてそれを前進させるのである。

わが共産主義者同盟（全国委員会）の、革命的左翼を名実ともに代表する単一党への飛躍をかけて、七九年階級闘争の戦場へわれわれは出陣する。さあ、さらにわれわれの任務を鮮明にしよう。

次に明らかにしておかなければならぬことは、かかるヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊は、帝・社帝の世界支配再編へと、それと結合した侵略反革命の再編・強化へと目的づけられ統合されるということである。この侵略反革命の再編・強化は、「戦争とファシズム」の準備なる敵の長期的戦略のもとにおし進めにつきりと照合している。したがって、現下の「中間連合政府」攻撃は、侵略反革命の再編強化には、プロレタリアートの階級闘争をブルジョア民主主義の幻想のもとにしばりあげ、それを「プロレタリアートの権力の樹立」で攻撃は、プロレタリアートの階級闘争をブルジョア民主主義の幻想のもとにしばりあげ、あると公言し、資本との国家の救済を主張し、もって階級闘争全体を排外主義の沼地へと組織せんとする。

いまひとつ、この侵略反革命の再編・強化は、新植民地主義支配の強化、統治形態の転換、差別分断支配の強化の諸攻撃と結合して進められている。したがって、「中間連合政府」攻撃は、かかる点をめぐった政治攻防の中に、その具体的姿、その貫徹形態として立ちあらわれてくるのである。

プロレタリアートの任務は、このような情勢を革命の準備へと転化することにある。きたるべき革命的危機とは、何よりも敵が自己の危機の突破にかけて帝國主義戦争とファシズムをもってこれを決着づけんとするまさにその時である。

レーニンは、その著『第二インターナショナルの崩壊』の中で次のようにのべている。「革命的情勢には革命是不可能であり、しかも、どんな革命的情勢でも革命をもたらすとはかぎらない」ということは、マルクス主義者にとっては疑う余地がない。一般的にいつて革命的情勢の徵候とは、どんなものであろうか？ 次の三つの主要な徵候をあげればたしかにまちがいはないだろう。（一）支配階級の激化として、（二）帝・社帝の世界支配再編の激化として、（三）国際党派闘争・国際階級闘争の激化として、ヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊の要素を、そしてとりもなおさず革命的情勢への移行の諸要素・性格を覚えることができる。

これを可能とするのは、われわれの現代過渡期世界に対する把握、階級的・党派的見地によるものである。われわれは現代過渡期世界を、資本主義の最高発展段階としての帝國主義が、社會帝国主義の巨大な育成を与件とするプロレタリア支配を通して延命をとげる時代、そしてその内部から世界プロレタリア独裁への移行の条件が成熟をとげてゆく時代であると見える。それは、われわれのスローガン「帝国主義の侵略反革命・社會・帝國主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争・世界プロ独を組織する世界党を国際階級闘争の

最前線に組織せよ」によって、すなわち國際党派闘争の時代として積極的・革命的実践としてのみ対象把握されるということなのである。

次に明らかにしておかなければならぬことは、かかるヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊は、帝・社帝の世界支配再編へと、それと結合した侵略反革命の再編・強化へと目的づけられ統合されるということである。この侵略反革命の再編・強化は、「戦争とファシズム」の準備なる敵の長期的戦略のもとにおし進めにつきりと照合している。したがって、現下の「中間連合政府」攻撃は、侵略反革命の再編強化には、プロレタリアートの階級闘争をブルジョア民主主義の幻想のもとにしばりあげ、それを「プロレタリアートの権力の樹立」で攻撃は、プロレタリアートの階級闘争をブルジョア民主主義の幻想のもとにしばりあげ、あると公言し、資本との国家の救済を主張し、もって階級闘争全体を排外主義の沼地へと組織せんとする。

いまひとつ、この侵略反革命の再編・強化は、新植民地主義支配の強化、統治形態の転換、差別分断支配の強化の諸攻撃と結合して進められている。したがって、「中間連合政府」攻撃は、かかる点をめぐった政治攻防の中に、その具体的姿、その貫徹形態として立ちあらわれてくるのである。

ひきいれられる

したがって、このような客観的な変化に主体的な変化が結合してレーニン主義武装蜂起の国際的・国内的条件へと「革命の情勢」を転化することこそ革命的プロレタリアートとその党の任務である。

革命的危機にさいしての、われわれの政治戦略はレーニン「内戦テーゼ」の今日的継承である。それは、(1)帝国主義戦争の時代におけるプロレタリアートの国際主義であり、(2)帝国主義戦争の時は、ブルジョア権力打倒の好機である。そしてこの二つをもつて統合的にうちだすことこそ、こんにちのわれわれの立場である。社会帝国主義・右翼日和見主義は、このプロレタリアートのブルジョアジーにたいする階級戦争II内戦を否定する。社会帝国主義は公然と、しかも武装反革命として、そして右翼日和見主義は陰然と。右翼日和見主義の「内戦」なるものは、階級闘争の非和解性一般の承認であり、今日的には、「中間連合政府」への合流・「反戦平和内閣」の希求にまで転落させ、共産主義者のこの方向をめざした系統的な、ねばりづよい、たゆみない準備活動を内側から解体せんとつとめる。このようないくつかの財政政策でののりきり、あらゆる

帝国主義は公然と、しかも武装反革命として、そして右翼日和見主義は陰然と。右翼日和見主義の「内戦」なるものは、階級闘争の非和解性一般の承認であり、今日的には、「中間連合政府」への合流・「反戦平和内閣」の希求にまで転落させ、共産主義者のこの方向をめざした系統的な、ねばりづよい、たゆみない準備活動を内側から解体せんとつとめる。このようないくつかの財政政策でののりきり、あらゆる

帝国主義は公然と、しかも武装反革命として、そして右翼日和見主義は陰然と。右翼日和見主義の「内戦」なるものは、階級闘争の非和解性一般の承認であり、今日的には、「中間連合政府」への合流・「反戦平和内閣」の希求にまで転落させ、共産主義者のこの方向をめざした系統的な、ねばりづよい、たゆみない準備活動を内側から解体せんとつとめる。このようないくつかの財政政策でののりきり、あらゆる

帝国主義は公然と、しかも武装反革命として、そして右翼日和見主義は陰然と。右翼日和見主義の「内戦」なるものは、階級闘争の非和解性一般の承認であり、今日的には、「中間連合政府」への合流・「反戦平和内閣」の希求にまで転落させ、共産主義者のこの方向をめざした系統的な、ねばりづよい、たゆみない準備活動を内側から解体せんとつとめる。このようないくつかの財政政策でののりきり、あらゆる

世界資本主義の危機

深まりゆく

七一年ドル・金兌換停止、七三年変動相場制への移行、そして七三年石油危機をマルクマールとして、世界資本主義は、明確にその相対的安定期の終焉を迎えた。それは、何よりも復興をとげた戦後世界資本主義の枠組みの崩壊であり、その内部から不可避に成熟をとげてゆくところの世界資本主義の本源的危

機の開始にはかならなかつた。七八年は、この事実がますますもつて切迫性をもつてあらわれた年であった。そして、ここに革命的危機への移行の経済的・物質的基礎がある。現下は、明らかに不況局面にある。そしてそれは、戦後史においてもかつて循環的にくり返された不況とは質的に異なつたものとしてあり、ブルジョアジーみずからもこれを「構造的不況」と呼ばざるをえない。しかしブルジョアジーは、「戦後の経済政策と経済制度の修正、見直しが必要」なる欺瞞をもつて、事態の根本を何とかおおいからし、また商品生産の物神性に骨のズイまでつかつた者たちは、そうとしか見えようがないのである。事態は鮮明である。

いくつかの財政政策でののりきり、あらゆる国独資的諸施策は、まったく破産が宣告されている。なぜならば、戦後世界資本主義の成長、それ自身が生みだしたところの危機、資本主義が資本主義であるかぎり埋めあわすこのできない生産の無政府性の増大—過剰生産、恐慌への転移—この兆候のますますもつての顕在化、これにほかならないからである。昨七月に西ドイツのボンで開かれた先進国首脳会談は、「世界経済の再建」と銘うつておこなわれた。それは、押し寄せる世界資本主義の危機にたいするブルジョアジーの危機意識の発露であると同時に、危機意識をおおいたて資本主義擁護—帝国主義主要路線の承認の道へと全世界のプロレタリアートをかりたてんとするものなのである。この会議においては、「景気・通貨・通商・エネルギー・南北問題」という五つの課題が掲げられた。

それは具体的に、(1)世界的な失業にたいする雇用機会の創出、そのための安定成長—インフレ抑制、(2)為替市場の安定、そのための介入、国際通貨基金による監視、(3)開放的国際貿易制度の維持・強化、そのための東京ラウンド（多角的貿易交渉）の進展、(4)輸入石油への依存度の低減、そのための戦略的石油備蓄、石油過剰消費の抑制、エネルギー開発—開発途上国の開発、(5)開発途上国の経済発展への援助としてしめされた。

ここにはつきりとあらわれているのは、「資本および設備の過剰、大量減産、減量経営→国内市場の狭隘化—輸出規制、伸び悩み→設備投資の一層の減退、産業の脱規模化、脱工業化、雇用情勢の悪化」という明確な悪循環である。そしてそれは、その活路を市場再分割戦の激化に求めざるをえないし、これらは協定は何らこれを緩和するものではなく、再分割の論理が鋭く貫かれているではないか。

これらの世界資本主義の危機は、ソ連社会帝国主義においては次のようにあらわれている。昨年初頭において、七六年からはじまつた第十次五ヶ年計画が早くも絶望的になつたように、社会帝国主義の国家もまた全面的な

生産の停滞—低成長期に入っている。その中の事実がますますもつて切迫性をもつてあらわれた年であった。そして、ここに革命的危機への移行の経済的・物質的基礎がある。現下は、明らかに不況局面にある。そしてそれは、戦後史においてもかつて循環的にくり返された不況とは質的に異なつたものとしてあり、ブルジョアジーみずからもこれを「構造的不況」と呼ばざるをえない。しかしブルジョアジーは、「戦後の経済政策と経済制度の修正、見直しが必要」なる欺瞞をもつて、事態の根本を何とかおおいからし、また商品生産の物神性に骨のズイまでつかつた者たちは、そうとしか見えようがないのである。事態は鮮明である。

いくつかの財政政策でののりきり、あらゆる国独資的諸施策は、まったく破産が宣告されている。なぜならば、戦後世界資本主義の成長、それ自身が生みだしたところの危機、資本主義が資本主義であるかぎり埋めあわすこのできない生産の無政府性の増大—過剰生産、恐慌への転移—この兆候のますますもつての顕在化、これにほかならないからである。昨七月に西ドイツのボンで開かれた先進国首脳会談は、「世界経済の再建」と銘うつておこなわれた。それは、押し寄せる世界資本主義の危機にたいするブルジョアジーの危機意識の発露であると同時に、危機意識をおおいたて資本主義擁護—帝国主義主要路線の承認の道へと全世界のプロレタリアートをかりたてんとするものなのである。この会議においては、「景気・通貨・通商・エネルギー・南北問題」という五つの課題が掲げられた。

それは具体的に、(1)世界的な失業にたいする雇用機会の創出、そのための安定成長—インフレ抑制、(2)為替市場の安定、そのための介入、国際通貨基金による監視、(3)開放的国際貿易制度の維持・強化、そのための東京ラウンド（多角的貿易交渉）の進展、(4)輸入石油への依存度の低減、そのための戦略的石油備蓄、石油過剰消費の抑制、エネルギー開発—開発途上国の開発、(5)開発途上国の経済発展への援助としてしめされた。

ここにはつきりとあらわれているのは、「資本および設備の過剰、大量減産、減量経営→国内市場の狭隘化—輸出規制、伸び悩み→設備投資の一層の減退、産業の脱規模化、脱工業化、雇用情勢の悪化」という明確な悪循環である。そしてそれは、その活路を市場再分割戦の激化に求めざるをえないし、これらは協定は何らこれを緩和するものではなく、再分割の論理が鋭く貫かれているではないか。

これらの世界資本主義の危機は、ソ連社会帝国主義においては次のようにあらわれている。昨年初頭において、七六年からはじまつた第十次五ヶ年計画が早くも絶望的になつたように、社会帝国主義の国家もまた全面的な

帝・社・帝の世界支配 再編策動の激化

帝国主義・社会帝国主義による世界支配再編の角逐が、多様に、しかもますます熾烈に繰りひろげられている。

ソ連—ベトナム友好協力条約、米中国交樹立は、帝・社・帝の世界支配再編の策動がアジアをめぐって全面化し、しかもそれが、今日的に民族解放—社会主義勢力の内部対立への介入を通して貫かれるという典型的な二つの事態であった。

米中国交樹立は、あの米中会談一日中国交回復、日中条約と続いてきた一連の帰結である。それは、明らかに、米帝国主義にとっては、(1)中国市場に対する資本主義的権益の確保のために、(2)民族解放—社会主義勢力の社会化のために、(3)アジアにおける侵略反革命体制の再編・強化のために、もはや避けて通

ることができないものとなつたことを示しているのである。したがつてそれは、「新時代の秩序」のはじまりではなく、アジアをめぐつた帝・社帝の抗争、これとの攻防をめぐつた民族解放・社会主義勢力の分裂、即ち、「抗争と分裂」をこそ示している。

七八年ににおける国際政治上のいまひとつつの焦点に、国連初の軍縮総会の開催があげられる。それは何ら「平和の時代」の訪れを告げる知らせるものではありえなかつた。それは、全世界のプロレタリアートにたいする平和幻想・武装解除のたぐらみであり、しかも明確に軍事的な均衡関係が崩壊し、「戦争の時代」の訪れの時におけるそれなのである。平和共存の「幻想」連合は、それ自体が世界支配の利害貫徹の手法であるように、今回の中軸とした世界支配再編策動を、如実に反映しており、その利害貫徹の場以外ではありえなかつた。

この軍縮総会は、「軍拡競争の中止」「核戦争防止のための努力」を中心的に掲げておこなわれた。これは、米ソの(連合・抗争)の今日的姿である。なぜならば、ここに端的に示されていることではあるが、既に事態は「核兵器競争」以降の軍備競争に移りつつあるのであり、「核拡散防止」のもとに米ソの枠のもとで自己のヘゲモニーを世界支配の中に貫徹せんとするものだからである。そして、同時に、新たな軍備競争に対する封じこめ、より有効な軍備増強をねらうもの以外ではないということである。

このことは、事実が雄弁に物語ついている。発表された国連の「六七年～七六年の十年間に亘る軍事支出・武器輸出の状況の報告書」にこの傾向は顕著である。(1)世界の軍事支出は、六七年の三千十九億ドルから、七六年には四千億ドルに達し、20%増であること。(2)七六年における軍事支出のうち、米は九百十億ドル、ソ連が千二百七十億ドルであり両者は全体の54%を占めている。そして七二年を境にソ連が米を追いこしていること。(3)各国の年間軍事支出の国民総生産に対する比率は、軒並み増大していること。(4)七六年における武器輸出は百三十億ドルと世界貿易の1.5%を占め、六七年からの60%の増加である。

既に、米国の圧倒的な「核優位」は崩れつてしまい、その中で中性子爆弾の生産、さらには高エネルギー・レーザー兵器、粒子線兵器の開発として米帝はその野望を明らかにしている。

この軍縮総会なるものが、次の軍拡競争のためのステップであることは、NATO強化・ワルシャワ条約機構強化と明確に対応してそれが開催されていることに明らかである。

北大西洋条約機構(NATO)の第五回首脳会議は、(1)「八〇年代から九〇年代はじめにかけて、少なくとも四百億ドル、最高一千億

ドルに達する」軍事力強化を誓約した「長期的防衛計画」を採択し、(2)「ソ連・東欧諸国とのワルシャワ条約機構軍の攻撃力に対する警戒」をうたいあげた。そして米大統領リカルダ・は、その閉幕演説において、「NATOにたいする攻撃は米本土への攻撃とみなす」事力を行使する用意がある」と公言したのだ。

まずわれわれは、現下の米帝とソ連社帝を中軸とした世界支配再編の角逐の焦点を、その軍事面において見てきた。次にわれわれは、「米帝及びソ連社帝の世界戦略を通してこのことを見てゆこう。昨年初頭における「一般教書」の中に、米帝のそれは明らかである。(1)「米国の安全保障」(2)「中東平和など世界平和の確保」(3)「国際経済の安定と成長」が主要目標として掲げられた。昨一年間の推移がしめしたように、これは次のようなものであった。

NATO一日米安保を軸にした侵略反革命体制の再編・強化。大統領秘密指令十八号において、「世界の重要な地域、たとえばペルシヤ湾あるいは朝鮮半島に、よりすみやかに展開できる機動部隊の創設」をうたつた「有事における新軍事体制」計画の作成をうちだしたことにその意図は明らかである。それは日本安保・日米共同作戦体制の再編・強化を中心的に、日米韓反革命体制のよりいつそうの強化をもくろむものであった。また中東和平工作、パナマ運河条約、副大統領モンデールのASEAN諸国の歴訪など、アラブ・アフリカ・ラテンアメリカ・アジアにおける、侵略反革命体制の強化と結合した新植民地主義支配の一層の強化が進められた。

そして、「米国内経済の安定こそ世界経済の安定」を掲げ、しかし、「ドル防衛、エネルギー節約」の二大公約は進行せず、むしろ日米経済交渉、大幅なドル安状況など、通貨通商戦争が激しさの度を加えた。さらにインフレ対策として、「賃上げ7%以下への抑制」にしめされるように米国内労働者人民への強収奪へとその鉢先がむけられている。

他方これにたいしてソ連社会帝国主義はどうなのか。

国内経済の停滞、資本主義の矛盾と階級闘争の活性化、これに対応した国内「反体制派」の鎮圧。そして、中国にたいする包围・封殺の攻撃を頂点にし、民族解放闘争への介入と従属のための策動を、とりわけアフリカを焦點として推し進めていた。さらに「緊張緩和」を掲げてのコメコン・ワルシャワ条約機構という体制的強化が一層おし進められた。これらのこととはすべからく、彼らの掲げるところの「共産主義への移行・社会主義体制の強化」という名目のもとにおし進められていて。そして、何よりも、国際共産主義運動の排外主義的反革命的制圧、ここにこそ彼らの

野望の焦点はある。

すでに見てきたように、米帝・ソ連社帝を中心とした世界支配再編の策動は、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊によつて失われた均衡を、自己のもとにまき返し、あるいは一元的に掌握せんとするものであるが、それは死活的延命方向であるが故にますます複雑化し、熾烈の度を加え、分裂と解体をともなつて進行するのだ。そうだ、その中には、はつきりと帝国主義国・社会帝国主義国のすべての、対立と抗争が貫かれているのだ。

この帝国主義と社会帝國主義の世界支配再編は、民族解放・社会主義勢力の前進にたいする包囮一封殺。この前進と結合する帝国主義下階級闘争の全面的制圧。ここにはつきりとその焦点がすえられている。

帝・社帝の重包囮のもとで、イエメン・ザイール・アフリカの角、イラン等と、アフリカ・アラブを中心に、民族解放闘争の胎動が開始されている。世界資本主義の危機―帝・社帝の世界支配再編の角逐、そしてそれとの攻防の中で、国際階級闘争の新たな段階が開始されている。次にその点に移るう。

戦後ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊の動因―革命的危機への移行の主体的動因、それが国際階級闘争の激化である。

国際階級闘争の激化、それはロシア十月革命をもつて開始された現代過渡期世界が、三〇年代をへて、帝・社帝の戦後世界支配へと封殺されんとしながらも、民族解放・社会主義勢力の前進を巨大な牽引力としながらひらかれてきたところに、その歴史的な到達地平があり、七〇年代中期の昂揚・ベトナム完全解放をもつて、それは一旦の頂点に達した。そしてそれは、民族解放・社会主義勢力にとっても、帝國主義下階級闘争にとつても、帝・社帝の結合した攻撃を国際階級闘争に面する問題として突き出さずにはおかなかつた。

国際階級闘争の現局面は、世界資本主義の危機との、帝・社帝の世界支配再編策動との攻防をめぐつて激化している。こうした国際階級闘争の新たな段階は、すでに国際共産主義運動が国際党派闘争をとおして先行的に獲得した地平を、その内に不可避にともなつて形成されており、国際共産主義運動の前進をめぐる激しい攻防ぬきには、国際階級闘争の新たな段階は一瞬たりとも存在しないといつても、けつして過言ではない。

さて、昨七八年は、このことをどのようにしめしたのであろうか。

一月におけるカンボジア・ベトナムの国交断絶、そのひきづく対立。革命第一世代の

烽火

あいつぐ死、「四人組」との闘争をへて、中国においては第五期全人民代表大会が開催され、「近代化された社会主義強国建設」のもとに、経済十ヶ年計画・新憲法の公布がおこなわれた。そして、以降、あいつぐ一連の「反霸権外交」が全面的に展開された。

また朝鮮民主主義人民共和国は、ルーマニアとの共同声明の中で、祖国の自主的平和統一「二つの朝鮮」策動との闘いをひきつき明らかにすると同時に、「反支配主義」をうちだし独自の位置を明らかにした。

華僑問題を通じたベトナム・中国対立は、さらに中国によるベトナム援助削減、三総領事館の閉鎖とつづき、中国のベトナム援助全面停止へといたった。

「四人組」追放以降、顕在化していたアルバニア・中国対立は、中国による対アルバニア援助停止の正式発表にまでいたった。

このように、戦後における國際階級闘争の牽引力であった民族解放社会主義勢力が、対立の渦中に投げこまれている。しかし、われわれは、事態の深刻性と混乱のみに眼を奪われてはならない。それは、その歴史的到達地平と、その突破を尖鋭に突きだしている。

民族解放闘争の激化は、イランでは戒厳令下の「集会禁止規制」をつき破って、「賃上げ、政治犯の釈放、秘密警察の解体、汚職容疑の大物たちの断罪」などの要求を掲げた反政府暴動がつづいている。さらにアラブ・アフリカを中心に、アジア・ラテンアメリカにおいては、部分的にはあれ、新たな胎動期に入りつつあると見ることができる。

またソ連・東欧圏においては、「昨年の「憲章七七グループ」をはじめとした、「反体制」活動や労働者の反抗が、強力な弾圧の前に一旦、鎮静させられながらも、なお広く深くひろがっている。

では、わが帝国主義下階級闘争はどうであるのだろうか。西欧、日帝下においては、かかる時代的背景の中で、反政府的気運が持続している。しかしそれは依然として、社会帝国主義の巨大な支配のもとにある。

帝国主義と社会帝国主義の結合。フランスの総選挙では与党連合が圧勝し、共産党マルシェは大統領ジスカルデスタンとの、「第五共和制二〇年の歴史はじめて」といわれる会談へと走った。イタリアでは、共産党は「経済再建・公共秩序維持」政策の協定をもつて、三ヶ月にわたる内閣不在という「政治空白」の救済者として立ちあらわれた。スペインでは、第九回スペイン共産党大会において、党規約からの「レーニン主義」削除を公式に表明し、社会帝国主義としての体系的純化を一層おし進めた。

いま、われわれは七八年における國際階級闘争の趨勢を概括してきた。革命的危機への移行の主体的因素としての國際階級闘争は、七八年においては、國際共産主義運動

の大激動としてその傾向をきわだたせている。

民族解放・社会主義勢力内部の対立、路線闘争、これがその一つである。それは、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊の重要な要因であるところの國際共産主義運動の大分裂があり尖鋭化させた、社会帝国主義との國際党派闘争の激化に規定されたものとしてある。

第一に、中国・アルバニアの対立についてである。この事態を一体何としてとらえねばならないのか。

六〇年代における、民族解放・社会主義勢力の中軸をないねてきた中国共産党は、中ソ論争、文化大革命をへて國際共産主義運動の大分裂を組織しながらも、ソ連社帝との闘争をスターリン主義にたいする根本的批判として結合してたたかうことができないところの、世界プロ独立・世界党建設をめぐる國際党派闘争として組織しえないという歴史的に形成された限界に深く規定されている。それは、中国共産党が、「プロ独立の継続革命」を主張し、スターリンの「社会主義」のものとでの階級闘争消滅に批判をこころみ、党の国家指導機能への溶解に反対し、党をプロ独立の階級闘争の前衛として建設しつづけることを追求し、「中国革命の最終的勝利は世界革命に帰される」という基本的立場をふまえながらも、スターリン・コミニンテルン指導の負の遺産として生みだされた、「自主独立・内政不干渉・兄弟党間の平等」という世界党建設を指定しえない一国党の立場にとどまっていいるところに鮮明である。

その実践的結果の第一は、中国プロ独立下の階級闘争の指導規準を、中国革命の世界革命への転化をめぐる党派闘争・党建設に設定しえないがゆえに生じる、国内階級闘争指導の不徹底である。それは、一国プロ独立の総和としての連邦制プロ独立というスターリン主義を突破しえないというところに絶路線上の限界があるのだ。

実践的結果の第二は、帝国主義足下、社会帝国主義、右翼日和見主義と分岐してたたかぬく先進的プロレタリアート、あるいは民族解放闘争をないなく、先進的人民との結合をなしきれないことである。安保承認、NATO承認などによる右翼日和見主義の擁護。アフリカなどの民族解放闘争においては米帝との闘争における阻害物としてあらわれざるをえないといいう誤りをなしている。これは「三つの世界論」とそれにもとづく、現代過渡期世界把握の誤り、反社帝・反霸権統一戦線という戦略の誤りに深く規定づけられている。

アルバニア労働党は、この中国の路線的敗北の二つの結果をとらえて、「三つの世界論」にともづく反社帝・反霸権統一戦線は、ブルジョアジーとプロレタリアートの対立という本質的問題を対象化せず「敵の敵は味方」というプラグマチズムにより、米帝と連合をめざすことによって、國際プロレタリアートの対立によって、

「團結を破壊する」と批判する。この批判は現代過渡期世界において、実践的優位性をもつにもかかわらず、現代革命の根本的課題たる「現代過渡期世界の革命的突破」という点においては、中国共産党と同根の弱点を有している。アルバニア労働党は、中国批判の要を、國際プロレタリアートの團結にさだめながらも、一国プロ独立の世界プロ独立への転化、一国党の世界党への改組、という鮮明な規準をかけた國際党派闘争として設定できない。そこであるからといって、一方における実践的優位性だけでは、全世界のプロレタリアートを團結させる國際主義へと發展させることはできないのだ。

第二に、かつて中国共産党とともに米帝とはげしくたたかいぬき、全世界のプロレタリアート人民のたたかいを勇気づけたベトナム共産党がこんにちでは、中国共産党・カンボジア共産党との対立・抗争を激化せしめていることについてである。

中国共産党、ベトナム共産党はたがいに民族主義と反対を批判している。だがこの「民族的対立」は、彼らのいうところの「平和共存の五原則」なるものによつては、決して解決しない。中国共産党、ベトナム共産党の対立の根幹に存在するものは、一国革命のもつ民族的限界は他の一国革命のそれと対立的要素をもたざるをえない。過渡期世界の止揚とはこの一国革命の民族的限界の止揚であり、その唯一の道は世界党指導にもとづく世界プロ独立の実現と世界プロ独立下での長期の階級闘争の継続にしかありえない。

しかるにこんにち、ソ連社帝においては、一国革命の民族的限界は「社会主義共同体」にもとづく民族間の平等と民主主義によつて克服されると主張する。だがそれは、克服ではなく、民族的限界の固定であり、民族的限界にもとづく各国革命の利害の対立の「調和」である。その帰結こそ、「國際分業・社會主義大家族」の美名の下でのソ連帝への各國革命の従属である。

中国共産党、ベトナム共産党は、かつてから存在する、ソ連社帝の批判をめぐる路線の対立を、世界プロ独立のための路線闘争として発展せえないがゆえに、経済的利害の対立などを契機として、民族的利害の対立へと不斷に陥らざるをえないのである。世界党建設のための社会帝国主義との國際党派闘争の見地のみが、この対立を首尾一貫した路線闘争へと発展させることができるのである。

七八年における國際共産主義運動の大激動を特徴づけるところのいまひとつは、帝国主義下、とりわけ西欧帝・日帝下における社会帝国主義の帝国主義との結合、それを通じた巨大なプロレタリアート支配、その激化である。第一に、西独における連邦議会での「テロ対策法」可決。イタリアにおける「赤い旅団」

によるモロ事件、に典型的な事態である。それは、一連のテロ事件が、強大な社帝党によるプロレタリア支配に対する絶望であり、社会帝国主義を急先鋒とした、革命運動―革命組織の根絶へとこれを利用せんとする攻撃である。

第二に、スペイン共産党の「レーニン主義」削除、フランスにおける「左翼連合」の分裂にしめされる事態である。

スペイン共産党における、この「レーニン主義」の党規約からの削除は、カリリョによって「民主・革命的なマルクス主義党」のイメージを形成せんとするものであり、またその背景に、共産党の非合法下時代に労働運動のヘゲモニーをもつてきた「労働者委員会」のメンバーの中央委への多数進出と、このことの全面的支持があつたことをみておかなければならぬ。またフランスでの「左翼連合」の分裂は、総選挙敗北に直接的に起因していることと同時に、社民―共産党によるプロレタリアート内部における基盤の確立をめぐつた積年のヘゲモニー争奪がその基底にあることもまた確かのことなのである。

総じて、現下の帝国主義下、とりわけ西欧帝・日帝下の、帝―社帝の結合、その現実化としての「中間連合政府」攻撃、そのもとでのプロレタリア内部への支配の強化、これである。この一見して否定的な事態は、にもかかわらず、プロレタリア内部での社会帝国主義と革命的プロレタリアートの全面的な分裂へと転化されずにはおかぬ。

以上のような国際共産主義運動の激動の中から、はつきりと我々は今日の国際階級闘争の激化が、現代過渡期世界の維持ではなく、その革命的突破を自己の任務とすることを、国際プロレタリアートの眼前に提起していることをみてとることができる。

帝國主義下階級闘争をたたかうプロレタリアート、民族解放―社会主義をたたかうプロレタリアートの单一の国際主義的團結の要は、自國革命を世界プロ独へと変革しつづけるための世界党建設をめぐる国際党派闘争の徹底遂行であり、これに規定づけた帝國主義下革命運動とプロ独下階級闘争の結合である。社会主義は、全世界的にしか実現されることはない。権力を掌握したプロレタリアートとその党は、世紀革命の実現にむけ、自己の一国権力を世界プロ独の一構成部分へと、党を世界党の一支部へと改組するたたかいをしないぬかなければならぬ。この革命的実践の見地にたつものみが、国際階級闘争―国際党派闘争の激化を、革命的危機への移行の主体的要因として発展させることができるのだ。

このような全世界的な情勢のなかで、日本帝国主義はアジア・朝鮮への侵略反革命のあらたな攻撃の段階をもつて、国際―国内人民への攻撃を展開している。われわれは次章においてこれを明らかにしてゆくこととする。

2

日本帝国主義の侵略反革命の新たなる段階

全世界的な帝国主義間対立の激化、反帝民族解放闘争のさらなる前進、帝国主義国内人民の反抗と憤激の増大という国内外の情況は、日本帝国主義の政治的・経済的危機を累進化させている。こんにち、日帝はこの危機の反革命的打開のために、帝国主義戦争の直接的遂行を、かつて日本戦後史のどの時期にもなかつた規模と速度をもつて準備はじめている。一昨年、円高危機にさいし「戦争でもなければ不況からの脱出は無理だ」(稻山鉄鋼連盟会長)としてひきだされた発言は、まぎれもなく日本ブルジョアジーの総意であった。日本帝国主義の危機突破のための侵略反革命戦争に日本人民を総屈服させ、戦争への国民総動員体制を構築してゆくことこそ、ブルジョアジー総体の緊急かつ死活の至上命令である。革命的プロレタリアートは日本帝国主義の侵略反革命の再編・強化との対決を革命的政治的任務の中軸にすべきらねばならない。

昨秋、有事立法粉碎闘争をめぐる新たな政治的高揚がしめしたように、日本階級闘争は「自國政府の戦争策動」を真正面にすえきる攻防へと自己をおしあげつつある。多くの人々が自国民党政府の「奇襲対処」を大義名分とした有事立法制定策動にたいし、これを戦争政策としてとらえ反対の声をあげた。だがしかしそれらの多くは、日帝の復活と復興を物語る「戦後民主主義」が、帝国主義自身の手によって上から解体されてゆくことにたいする危機感であり、あるいは戦争一般への拒否感情にもとづくものであった。したがってこの自然発生性は、帝国主義の超過利潤を經濟的基盤に成長してきた帝国主義の同盟者社会帝國主義・社共の護憲平和運動に丸が加えられるという否定的事態を生み出したのである。社共やこれに追随する右翼日和見主義者たちによつて、「戦争」はだれが、何のために、どこにむけて準備されようとしているのか、この現実にたいして人民のとるべき革命的立場は何かといふ核的な問題は、排外主義的・一国主義的にねじまげられて人民の前に提起されている。

革命的プロレタリアートはいまこそこの問題に、鮮明な真に革命的な回答をあたえねばならない。自國帝國主義・日帝によつて準備されている「戦争」の基本的性格をわれわれは次の三点においてとらえる。

それは第一に、南朝鮮にたいする政治的・

経済的・軍事的支配権を確立・護持し、これを踏み台に、東アジア全域を自己の新植民地主義的権益圏として征覇するための戦争である。一九五〇年にはじまる、朝鮮戦争の軍事特需で復興の礎をきづきあげ、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制確立のもとで「高度経済成長」をとげ、六五年日韓条約締結をもつてアジアへの再侵略を本格化させてきた日帝にとって、南朝鮮は手ばなすことのできない政治的・経済的・軍事的生命線なのである。七〇年代の前半期から中期にかけて、日帝は韓国経済の主要な分野で米帝を追いぬき、その命脈を掌握しつつある。貿易の分野では、韓国の対日輸入依存度は七六年一三五・三%、七七年一三六・三%を記録し、三分の一以上が日本によって占められ、六五年から七七年のあいだの対日貿易赤字累計は約九七億ドルにのぼっている。韓国への直接投資の分野では、日本は七六年五月までに総数七五七件、六一億二千万ドルと件数で全体の八一%、金額で六六%を占め、借款をふくむ韓国の外資導入総額においても、第四次経済開発五ヶ年計画への四〇億ドルの「援助」を加えるならば、日本が米国にかわり第一位の座を獲得するのは確実である。また韓国への技術輸出においても、七六年現在、日本は全体の六六・七%を占めるにいたっている。こんにち日帝は韓国経済の全部門で絶対的地位を確立しつつあるのであるが、それは七〇年日韓協力委の席上提唱された「矢次試案」や、その焼きなおしである七八年「アジア版ECA構想」をまさに、地でゆくものにほかならない。こうした現実は極限的なまでの韓国労働者人民への強奪取と民族的抑圧に支えられてつくりだされているのである。日本からの公害産業の韓国への大量移転、日本建設資本によるサウジアラビア、イランへの「人力輸出」、韓国女性への民族的・性的蹂躪りんであるキーセン観光、など、日帝のほしいままの略奪・専横のものと、韓国労働者は日本の四分の一から十分の一という飢餓賃金と長時間重労働を強要され、日本企業で酷使されている。これにたいし、韓国の労働者人民は、朴維新独裁体制打倒とならんではつきりと反日(帝)の旗をかけ、韓国学生の連続的決起、あいつぐ予告決起を始めとし、また平和市場や東一紡績女子労働者の決起にみられる韓国労働者の英雄的たたかいが全土を燃えあがらせているのである。

準備されようとする戦争の基本的性格の第二は、それがアジア・朝鮮の反帝民族解放闘争をたたかう党と人民諸勢力にたいする、資源・領土・領海の略奪をもふくむ公然たる反革命の戦争であることである。昨年、日帝は

「全方位外交」なるものをかかげ、きわめて精力的に、一連の日ソ交渉や日中条約締結交渉などの外交政策を展開してきた。この意味するところは、日帝にとつての新たな市場開拓や反革命的協商関係の形成の策謀にとどまるものではなく、より本質的には米帝世界戦略との結合のもと、ソ連社帝と対峙し、中国の包囲・変質を画策しつつ日帝の朝鮮侵略反革命戦争を血路とした、アジア全面進出の緒戦の道をはき清めることにあつたのである。

当面する戦争の対象ははつきりと、朝鮮労働党・朝鮮民主主義人民共和国と日米帝のカイライ政権たる朴軍事独裁政権を革命的に打倒せんと前進をつづける南朝鮮の革命運動にしばりきられている。事実、昨年三月強行された史上最大級の日米韓合同軍事演習「チーム・スピリット78」は「北朝鮮が攻撃してくれば九日間でせん滅する」という「九日間戦争計画」をあきらかに下敷きとしたものであつた。また伊藤防衛局長は昨八月十六日「日本の周辺諸国の中で、日本の領土に近接しているところに紛争がおきた場合に、あるいはまたそういう国々が日本にたいして侵略の意図をもつた場合に、侵略としておこる可能性というものは重視している」「その中でもきわめて近い朝鮮半島の問題というものも考えている」と国会答弁し、戦争準備が「北の脅威」や「万萬一の奇襲」にたいしてではなく朝鮮半島の革命運動にはつきりと焦点づけられていることを暴露したのである。

第三の基本的性格は、第一・第二のそれとむすびついて、日帝が、米帝・西独帝を筆頭とした欧米諸列強とのし烈な帝国主義間市場再分割戦にかちぬくことを可能にしうる国力と国家体制の建設をめざす戦争であるということにある。すなわち日帝ブルジョアジーは、戦争の準備と遂行をつうじて、「平時」に数倍する規模で、軍事力の増強をはかり巨大な戦争特需を手中におさめ、もって強大な国家暴力装置に支えられた国家総動員体制を構築しようとしているのである。むろんこの過程は革命党と革命運動への徹底した壊滅攻撃(組織破防法攻撃)と、人民を排外主義のもとへ暴力的に統合してゆくための政治攻撃をともなつて進むよりほかはない。そしてこれらは、ブルジョアジーがファシズムの反革命的決起を準備する強力な土台を形成するのである。戦争は、この目的のための最大的政治手段としての位置をしめるのである。

敵の戦争準備に対する

内戦の準備

このような性格をもつ侵略反革命戦争準備の攻撃にたいし、社会帝国主義どもは、それが(1)米帝の侵略戦争に日本が、まきこまれる危機であるとすりかえ、さらに(2)平和憲法の復活であると批判し、そして(3)この危機を救

うのは国民(民主)連合政府のための護憲闘争であるとするのである。これは帝国主義の危機のなかで動搖を深める小ブルジョアジー、労働貴族たちの危機意識の政治的表現である。たゞまらず、帝国主義と連合した社帝の、プロレタリアートはそれがいかに超階級的な外皮をまとつたものであろうと、ブルジョア民主共和制にどのような幻想をも抱くことはできないし、自國帝国主義の侵略反革命とその戦争が、ブルジョア独裁の別名にすぎない「中间連合政府」の出現によって阻止されるなどという願望にひたることはできない。革命的プロレタリアートの首尾一貫した政治的立場は、帝・社帝の中間連合政府攻撃下での侵略反革命とその戦争準備にたいし、ブルジョア国家権力を打倒するための国内戦の準備、武装蜂起―プロレタリア独裁の準備を労働者人民にむかって訴え、これを排外主義との死力をつくしたたかいを通じて单一の階級闘争へと組織してゆくことにある。

第一次帝国主義戦争のさなかレーニンは次のように提起した。「戦争は、疑いもなく、もっともきびしい危機を生みだし、大衆の災厄を信じがたいほどひどいものにした。」われわれの義務はこの気分(大衆のあいだの革命的氣分)を意識化し、深め、それにはつきりした形をあたえることに手だけすることである。この任務をたやすく言ひあらわしているのは、帝国主義戦争の内戦への転化といふスローガンだけである。そして戦時におけるあらゆる一貫した階級闘争、真剣に実行されるあらゆる「大衆行動」の戦術は、からずこのことへ導いていくのである(一九一五年『社会主義と戦争』)。

レーニンは、帝国主義戦争によつて生まれる帝国主義の政治的・経済的危機を自國帝国主義の打倒とプロレタリア革命のために「利用」しなければならないことを説き、ブルジョア合法性を物神化する社会排外主義者(第二インター)との断固たる訣別・闘争と「非法の組織と煽動への移行」を訴え、これらのすべてをふくんで「帝国主義戦争を内戦へ」という全世界のプロレタリアート階級戦争(内戦)を始めたのである。したがつてそれは自國帝国主義へのプロレタリアート階級戦争(内戦)の客観的条件を静止的に帝国主義戦争の開始として描いたものでは決してない。レーニンは、この内戦スローガンを全世界のプロレタリアートが社会排外主義とたたかい、單一の国際的團結を実現するための、国際主義の生き基準としてかかげたのである。小ブルジョアジーにとってはこの世の終末としてうつる戦争の勃発を、革命的情勢の最大限の成熟としてとらえかえし、プロレタリアートの革命運動へ組織化してゆく願つてもない好機へ

と転化してゆくことをつきだした点にこそ、その真ずいはあるのである。だからこの呼びかけは、革命党と革命的プロレタリアートの、世界党建設の苦闘、武装蜂起のための計画的系統的準備の活動とむすびつかないかぎりかつしてその内実を実現することはできない。

武装蜂起の計画的系統的準備――この実践的中心は、被抑圧人民諸階層の自然発生的闘争の個別性・部分性を、帝国主義の延命の中環(侵略反革命)との闘争をもつて止揚・発展させ、ブルジョア国家の打倒と権力奪取をめざす单一の階級闘争を組織すること、すなはち、革命的政治闘争の組織化にある。搾取支配の耐えがたいまでの強化にたいするプロレタリア大衆の無数の経済的・民主主義的憤激と、侵略反革命と対決する政治闘争を結合し、これを目的意識的な革命的政治闘争へとヨア国家権力を打倒するための国内戦の準備、武装蜂起―プロレタリア独裁の準備を労働者人民にむかって訴え、これを排外主義との死力をつくしたたかいを通じて单一の階級闘争へと組織してゆくことにある。

第一次帝国主義戦争のさなかレーニンは次のように提起した。「戦争は、疑いもなく、もっともきびしい危機を生みだし、大衆の災厄を信じがたいほどひどいものにした。」われわれの義務はこの気分(大衆のあいだの革命的氣分)を意識化し、深め、それにはつきりした形をあたえることに手だけすることである。この任務をたやすく言ひあらわしているのは、帝国主義戦争の内戦への転化といふスローガンだけである。そして戦時におけるあらゆる一貫した階級闘争、真剣に実行されるあらゆる「大衆行動」の戦術は、からずこのことへ導いていくのである(一九一五年『社会主義と戦争』)。

レーニンは、帝国主義戦争によつて生まれる帝国主義の政治的・経済的危機を自國帝国主義の打倒とプロレタリア革命のために「利用」しなければならないことを説き、ブルジョア合法性を物神化する社会排外主義者(第二インター)との断固たる訣別・闘争と「非法の組織と煽動への移行」を訴え、これらのすべてをふくんで「帝国主義戦争を内戦へ」という全世界のプロレタリアート階級戦争(内戦)を始めたのである。したがつてそれは自國帝国主義へのプロレタリアート階級戦争(内戦)の客観的条件を静止的に帝国主義戦争の開始として描いたものでは決してない。レーニンは、この内戦スローガンを全世界のプロレタリアートが社会排外主義とたたかい、單一の国際的團結を実現するための、国際主義の生き基準としてかかげたのである。小ブルジョアジーにとってはこの世の終末としてうつる戦争の勃発を、革命的情勢の最大限の成熟としてとらえかえし、プロレタリアートの革命運動へ組織化してゆく願つてもない好機へ

と転化してゆくことをつきだした点にこそ、その真ずいはあるのである。だからこの呼びかけは、革命党と革命的プロレタリアートの、世界党建設の苦闘、武装蜂起のための計画的系統的準備の活動とむすびつかないかぎりかつしてその内実を実現することはできない。

武装蜂起の計画的系統的準備――この実践的中心は、被抑圧人民諸階層の自然発生的闘争の個別性・部分性を、帝国主義の延命の中環(侵略反革命)との闘争をもつて止揚・発展させ、ブルジョア国家の打倒と権力奪取をめざす单一の階級闘争を組織すること、すなはち、革命的政治闘争の組織化にある。搾取支配の耐えがたいまでの強化にたいするプロレタリア大衆の無数の経済的・民主主義的憤激と、侵略反革命と対決する政治闘争を結合し、これを目的意識的な革命的政治闘争へとヨア国家権力を打倒するための国内戦の準備、武装蜂起―プロレタリア独裁の準備を労働者人民にむかって訴え、これを排外主義との死力をつくしたたかいを通じて单一の階級闘争へと組織してゆくことにある。

安保・日韓闘争と 産業報国会化攻撃

昨年、有事立法制定策動を頂点に吹きあれた攻撃は、日本帝国主義の八〇年安保にむけた巨大な布石であった。日帝は八〇年安保攻撃をもつて侵略反革命の新たな段階をきりひらき、戦争への国民総動員体制の一挙の確立をもくろんでいるのである。敵のこの攻撃にたいし、日本階級闘争は八〇年代にむかってこれとの全面的対決をかちとらなければならぬ。

安保条約再改定、憲法改悪、防衛二法改悪を射程に入れて進行する事態の、特徴的第一は、日米帝の市場再分割抗争の激化を背景として、日米安保体制に占める日帝の独自の位置が飛躍的にたかまつていることである。昨六月二九日、伊藤防衛局長は「從来の日米安保体制といふものは、すべてアメリカに寄りかかっているというような考え方」にもとづくものであったが、「過去」二〇年を通じて内容そのものが変わってきた」と発言した。これは日米帝間の政治的経済的、そして軍事的力量関係の変化の単純反映にとどまるものではなく、日帝が自己の延命をかけて、米帝と互角の安保体制における地位を確立せんとする野望をもしめしているのである。日帝は米帝の「安保責任分担」要求を積極的にうけ入れ逆に、安保協の強化拡充の要求を米帝に攻勢的につきつけてゆくなどの、新たな事態がこの数年のあいだ展開されているのである。

第二に日米共同作戦体制が飛躍的に強化され、その真ずいはあるのである。だからこの呼びかけは、革命党と革命的プロレタリアートの、世界党建設の苦闘、武装蜂起のための計画的系統的準備の活動とむすびつかないかぎりかつしてその内実を実現することはできない。

武装蜂起の計画的系統的準備――この実践的中心は、被抑圧人民諸階層の自然発生的闘争の個別性・部分性を、帝国主義の延命の中環(侵略反革命)との闘争をもつて止揚・発展させ、ブルジョア国家の打倒と権力奪取をめざす单一の階級闘争を組織すること、すなはち、革命的政治闘争の組織化にある。搾取支配の耐えがたいまでの強化にたいするプロレタリア大衆の無数の経済的・民主主義的憤激と、侵略反革命と対決する政治闘争を結合し、これを目的意識的な革命的政治闘争へとヨア国家権力を打倒するための国内戦の準備、武装蜂起―プロレタリア独裁の準備を労働者人民にむかって訴え、これを排外主義との死力をつくしたたかいを通じて单一の階級闘争へと組織してゆくことにある。

れていることである。昨十一月二十五日、日米防衛協力小委によつて、有事の際の「日米共同対処行動指針(ガイドライン)」の全内容が発表された。これによれば、共同行動の状況設定を「日本が武力攻撃をうけた場合」だけでなく「恐れのある場合」をもふくませ、さらに「日本以外の極東で日本の安全に影響を与える事態がおこった場合」までも想定し、そしてこれを遂行する共同指令部「指揮調整所」の設置を企図しているのである。これらは、安保条約第五条、第六条の実戦化を意味している。他方、「朝鮮有事」をみすえた日米共同軍事演習も新たな展開をみせている。「チーム・スピリット78」を頂点に、米第七艦隊と海上自衛隊との伊豆沖での合同演習、沖縄、九州地方での朝鮮半島に的をしばった空自と米空軍による要撃訓練、そして「ガイドライン」発表とともに開始された三沢基地での日米空中戦闘訓練などが昨年急ピッチで展開されてきたのである。とりわけ、北は朝鮮半島を、南は東南アジア海域からマラッカ海峡をにらむ戦略的要所に位置する沖縄にたいする攻撃は、すさまじさをきわめている。在沖米軍による美弾砲撃訓練、朝鮮での山岳戦を想定した戦車道の建設、あるいは昨十月の自衛隊による大規模な総合訓練にくわえ、日帝の石油政策・軍事燃料備蓄計画の重要な一環としてのC.T.S建設などが、沖縄人民への生活破壊、差別抑圧の強化をともなつて権的にすすめられているのだ。まさに沖縄は朝鮮侵略反革命戦争の直接出撃拠点、日米共同作戦体制の要石としてうちかためんとする日米帝の攻撃の嵐にみまわれている。

第三に帝國主義軍隊II自衛隊の「脅威を与える軍隊」としての確立、すなわち即戦体制確立にむけた動向が、急激にすすんでいることである。昨六月八日、竹岡官房長は「大体現時点では御承知のおりポスト四次防、防衛計画の大綱」ということで、一応基盤的防衛力、量的には平時におきます現在の国際情勢のもとににおいてはある程度、達成され、これからは質的な強化に移ろうといつ段階でござります」といはなつた。日帝の軍備増強路線はあきらかに「質的」、すなわち実戦性・即戦性に重点を移行しつつあるのである。いよいよもなく有事立法や、昨八月より公然と開始された「新三矢作戦研究」はその筆頭にあげられるものである。さらに「有事」に即した自衛隊中枢機構の整備を、統合幕僚会議の強化、陸海空の統合的「元的指揮機能」II「中央指揮所」の新設をふくめ、防衛二法の改悪とともににもくろんでいる。また軍事力の面では、「自衛力の限度は国際情勢、軍事技術水準によつて変わりうる」「自衛のための範囲内であれば、核兵器でも生物化学兵器でも何でもてる」という昨年の二つの福田発言を突破口に、「憲法九条条項」「非核三原則」をことごとく空洞化させ、P15、P30導入

れていることである。昨十一月二十五日、日米防衛協力小委によつて、有事の際の「日米共同対処行動指針(ガイドライン)」の全内容が発表された。これによれば、共同行動の状況設定を「日本が武力攻撃をうけた場合」だけでなく「恐れのある場合」をもふくませ、さらに「日本以外の極東で日本の安全に影響を与える事態がおこった場合」までも想定し、そしてこれを遂行する共同指令部「指揮調整所」の設置を企図しているのである。これらは、安保条約第五条、第六条の実戦化を意味している。他方、「朝鮮有事」をみすえた日米共同軍事演習も新たな展開をみせている。「チーム・スピリット78」を頂点に、米第七艦隊と海上自衛隊との伊豆沖での合同演習、沖縄、九州地方での朝鮮半島に的をしばった空自と米空軍による要撃訓練、そして「ガイドライン」発表とともに開始された三沢基地での日米空中戦闘訓練などが昨年急ピッチで展開されてきたのである。とりわけ、北は朝鮮半島を、南は東南アジア海域からマラッカ海峡をにらむ戦略的要所に位置する沖縄にたいする攻撃は、すさまじさをきわめている。在沖米軍による美弾砲撃訓練、朝鮮での山岳戦を想定した戦車道の建設、あるいは昨十月の自衛隊による大規模な総合訓練にくわえ、日帝の石油政策・軍事燃料備蓄計画の重要な一環としてのC.T.S建設などが、沖縄人民への生活破壊、差別抑圧の強化をともなつて権的にすすめられているのだ。まさに沖縄は朝鮮侵略反革命戦争の直接出撃拠点、日米共同作戦体制の要石としてうちかためんとする日米帝の攻撃の嵐にみまわれている。

第四に日韓体制の、政治的側面のみならずその軍事的側面における飛躍的強化である。そのひとつのは、日韓軍事体制の完成化の策動である。すでに日韓間には六五年秘密軍事協定がむすばれており、七〇年には日韓将校交換協定が締結され、こんにち日常的な軍事要員の往来と軍事協議体の運営が常態化している。昨六月二〇日、坂田・朴会談において「日韓防衛議員懇談会」設置計画がもちだされ、さらに九月の第十回日韓定期閣僚会議の席上、「日韓定期国防閣僚会議」新設が密議されるにいたつてである。日帝は従来、日米安保条約と米韓相互防衛条約を媒介にして、朴政権との軍事条約上は間接的な関係をむすんできたわけであるが、これを一举に形式的にもより直接的な関係に転換しようとしているのである。ふたつ目の焦点は、日帝による韓国軍需産業の完全支配のもくろみである。七〇年代に入つて日本独占資本は韓国重化学工業部門への集中投資をすすめ、さらには、韓国戦力増強五ヶ年計画の土台をなす第四次経済開発計画への全面的介入をとおして、韓国軍需産業支配の基礎を形成した。そして、韓国軍需産業部門への日本規模で開始され、韓国軍需産業部門への日本独占資本による直接投資もまた、きわめて大規模に進行した。日帝はこれによって朴独裁政権への軍事的テコ入れを強化するとともに韓国を中継点に、大々的な兵器海外輸出をも野望しているのである。

以上あきらかにしたこれらの諸動向が、一点のくもりもなく日帝の八〇年安保攻撃に、政治的軍事的に統合されていることをわれわれはみぬかなければならない。敵の八〇年安保攻撃こそ、同時に、労働者人民を排外主義のもとに組織し、戦争への国民総動員へと暴力的にかりたててゆく攻撃の中心環である。このもとに、刑法改悪・保安处分新設、七九年度養護学校義務化の策動、あるいは「11・22事件」にみられる在日朝鮮人運動への大弾圧、狹山・地名總鑑を頂点にした部落差別攻撃の激化など、一連のたたかう人民諸勢力にたいする弾圧と、これをもテコとした差別分断支配の徹底強化がもくろまれ、他方、元号は天皇制・天皇制イデオロギー攻撃が一段と防衛二法に国連軍への参加規定を設けることが内定しており、昨年、朝鮮有事のさい難民救済のために人道上の見地から、自衛隊を朝鮮半島周辺の海域に出動させることもありうるという政府発言が、幾度となくくりかえされているのである。日韓大陸だな共同開発地域への自衛隊派兵の表明にみられるように、「海外派兵の必要性」なるものが次の段階には、「邦人保護」や「権益防衛」「海上路防衛」のための「派兵の必要性」へとエスカレートしてゆくのは必至である。

第四に日韓体制の、政治的側面のみならずその軍事的側面における飛躍的強化である。そのひとつのは、日韓軍事体制の完成化の策動である。すでに日韓間には六五年秘密軍事協定がむすばれており、七〇年には日韓将校交換協定が締結され、こんにち日常的な軍事要員の往来と軍事協議体の運営が常態化している。昨六月二〇日、坂田・朴会談において「日韓防衛議員懇談会」設置計画がもちだされ、さらに九月の第十回日韓定期閣僚会議の席上、「日韓定期国防閣僚会議」新設が密議されるにいたつてである。日帝は従来、日米安保条約と米韓相互防衛条約を媒介にして、朴政権との軍事条約上は間接的な関係をむすんできたわけであるが、これを一举に形式的にもより直接的な関係に転換しようとしているのである。ふたつ目の焦点は、日帝による韓国軍需産業の完全支配のもくろみである。七〇年代に入つて日本独占資本は韓国重化学工業部門への集中投資をすすめ、さらには、韓国戦力増強五ヶ年計画の土台をなす第四次経済開発計画への全面的介入をとおして、韓国軍需産業支配の基礎を形成した。そして、韓国軍需産業部門への日本規模で開始され、韓国軍需産業部門への日本独占資本による直接投資もまた、きわめて大規模に進行した。日帝はこれによって朴独裁政権への軍事的テコ入れを強化するとともに韓国を中継点に、大々的な兵器海外輸出をも野望しているのである。

以上あきらかにしたこれらの諸動向が、一点のくもりもなく日帝の八〇年安保攻撃に、政治的軍事的に統合されていることをわれわれはみぬかなければならない。敵の八〇年安保攻撃こそ、同時に、労働者人民を排外主義のもとに組織し、戦争への国民総動員へと暴力的にかりたててゆく攻撃の中心環である。このもとに、刑法改悪・保安处分新設、七九年度養護学校義務化の策動、あるいは「11・22事件」にみられる在日朝鮮人運動への大弾圧、狹山・地名總鑑を頂点にした部落差別攻撃の激化など、一連のたたかう人民諸勢力にたいする弾圧と、これをもテコとした差別分断支配の徹底強化がもくろまれ、他方、元号は天皇制・天皇制イデオロギー攻撃が一段と防衛二法に国連軍への参加規定を設けることが内定しており、昨年、朝鮮有事のさい難民救済のために人道上の見地から、自衛隊を朝鮮半島周辺の海域に出動させることもありうるという政府発言が、幾度となくくりかえされているのである。日韓大陸だな共同開発地域への自衛隊派兵の表明にみられるように、「海外派兵の必要性」なるものが次の段階には、「邦人保護」や「権益防衛」「海上路防衛」のための「派兵の必要性」へとエスカレートしてゆくのは必至である。

こんにち、不況の構造化長期化は、労働者人民のぼう大な自然発生的決起をその対極に生みだしつつある。

鐵鋼・造船・織維などの産業部門をはじめとして、生産縮少と合理化のなかで、首切り一時帰休、賃下げ、配転などの資本の攻撃が吹きあれている。慢性的円高による輸出産業の壊滅的打撃がこれにいつそうの拍車をかけている。完全失業者はブルジョアジーの統計ですら百二十五万人を記録し、実数三百七十四万人にのぼるといわれている。最近あついで、三菱重工一万、新日鉄七千人の人員整理発表、住友重機千九百人の首切り提示、石川島播磨重工千人希望退職募集、沖電機千五百人の人員整理などの攻撃が波状的におこなわれた。この動向は、三公社五現業などいわゆる官公労にもおよび、國鉄五万人合理化計画(七六~八〇年)、郵便の保険・賃金業務オランダ化を中心とした合理化、電々における御用組合一体となつた第六次合理化計画の推進など、のきなみの合理化攻撃が強化されている。中小未組織においては、偽装倒産、賃金カット、有無をいわさぬ解雇など攻撃はもなつて、事態はきわめて深刻である。産業構造の全面的再編とともに進行するこれらの事態にたいし、労働者の頑在的・潜在的怒りは、ますます広く深くひろがりつつある。

ブルジョアジーの労働者支配の戦略的方向性は、巨大な帝潮流との連合によつて個々のプロレタリアートの決起を個別撃破し、プロレタリアートを中間連合政府への期待II改良と繁栄の最後の幻惑につなぎとめ、階級協調と城内平和の一時期をとおして、その階級性II革命性を解体し、もつて賃金奴隸制延引のための帝國主義戦争へと動員してゆくことにある。ここ数年の春闘の完全な制圧、民営化のどう喝による公労協スト権論争の封殺、あいつぐ最高裁労働事件逆転反動判決(名古

屋中郵、國労松山)、三里塚処分などの攻撃は総評・公労協の上からの変質解体策動とともになって、戦後日本労働運動総体への根底的再編として進行しているのである。

これにたいし、戦後日本労働組合運動の戦闘性を特殊に吸合してきた社民は、右は、敵の総評変質解体攻撃に歩調をそろえ(春闘見なおし論、産別共闘路線―全電通、春闘統一スト脱落―全通、経営参加・自主規制路線―国労)、「左」は経済闘争の戦闘化を危機感にかられて強調し、しかし相方も「連合の時代」(富塚)路線の枠内での競合に終始しつつ、資本主義の危機救済の敗北の沼地へとプロレ

タリアートのたたかいを、みちびき入れようとするのである。また民間大単産労働組合を牛耳る同盟—I.M.F.・J.C.は、造船重機などを先頭に、ブルジョアジーの「不況からの脱出」を大義名分とした兵器国産化・武器輸出・軍備増強のかけ声に唱和し、これを積極的に推進するにまでいたっている。昨日の労使協調のかれらの姿は、こんにち侵略反革命戦争準備のよりよきパートナーへと発展した。

社民といわば、同盟といわば、かれらはブルジョアジーの労働者支配の安全弁たる地位にあまんじることなく、自己のはたすべき役割を、ブルジョアジーのプロレタリアートにたいする階級解体・絶滅の攻撃の尖兵へとはつきりと確定したのである。これが帝国主義と社会帝国主義の連合した、プロレタリアートへの産業報国会化攻撃の現在の姿にほかならない。

では、中間連合政府攻撃の労働運動への貫徹としての産業報国会化の攻撃は、いつたいプロレタリアートの憤激をどこに帰結させるものなのか。日本階級闘争の歴史は、この点で屈辱的な敗北の歴史を背負っている。われわれはこれを教訓に転化させねばならない。

「産業報国会」とはいうまでもなく、第二次帝国主義戦争に日本労働者階級を動員するための翼賛組織であった。それは一九三八年の国家総動員法の成立と軌を一にして、労働組合にかわる官製組織として本格的につくられ、四〇年には、五五〇万人の労働者を擁する大日本産業報国会に一元的に統合された。大日本産業報国会の前身である産業報国会連盟の創立趣意書にはその理念が次のように記されていた。「今や我が國は未曾有の歴史的転換に際会し、国家内外の情勢また真に重大を極め、日本国民たるの使命は容易ならざるものがある。……惟うに光輝ある日本の歴史は皇室を中心とし、皇國一家の理想を根本として万邦に比類なき國体を伝えている。……されば皇國の産業に於ては労使の対立もなければ、各事業者の抗争も存在しない。労使一体、全産業人一体となつて、國運の進展に資するを以て第一義とすべく、斯して始めて産業の發展と国民の厚生を期することができる」と。すなわち、戦時体制下でわきおこる労働者の

不満・反抗をたたきつぶし、戦争遂行の動員体制を確立するために、経済闘争とその組織(労働組合)の片りんすら許さず、國体Ⅱ天皇制と、國運Ⅱ資本主義の存亡の救済者へと不可避に増大する階級矛盾は、他帝國主義列強と被抑圧民族への憎悪に転化された。プロレタリアートにはそれが、資本主義の危機を根拠にして生みだされる労働苦・生活苦・精神的苦悩からの解放であると信じこまれた。

これはすぎ去った過去の悪夢や、ばくせんとした遠い将来のことではない。われわれの生きたたかう時代のブルジョアジーとその國家権力もまた、このような暴力的手段によつてしか、プロレタリアートを侵略反革命戦争への行軍に動員できないことを知りつくしているのである。そして、この歴史的過渡をき

3

帝国主義・社会帝国主義の結合と排外主義の組織化

革命的危機への過渡にあつて、日本階級闘争は、政府の打倒といかなる権力を樹立するのか、をめぐる党派闘争ぬきには一步も前進しない地點に到達している。昨春三里塚開港阻止決戦をひとつ歴史的攻防として持続する激闘は、日本階級闘争をさらに一步おしすすめた。たたかいは、経済的危機と恒常的な政府危機からのがれることのできないブルジョアジーにたいして、「これまでどおりにやつてはいけない」ことを何度も思い知らせるとともに、革命的政治闘争にはらまれた『武装蜂起』とソビエトの萌芽』をいかにして発展させていくのか、を不可避免のものとしてつきだした。われわれはかつて現下の階級闘争の逢着点を次のように描いた。――労働運動と労働組合が、圧倒的な社会帝国主義者に支配されること。被抑圧人民の個々のたたかいが『反帝國主義・政府打倒』のスローガンを頂点とする自然成長の極限にまでたたかいぬかれ、いまやみづからそれを突破できないところにまでいたついていること――この逢着点と壁の突破は、階級深部における社会帝国主義と党派闘争の勝利的推進ぬきにありえない。同時に右翼日和見主義、急進民主主義との全面闘争として武装されねばならない。

これらとのたたかいは、革命的プロレタリアートにとって死活をかけたものである。革命的プロレタリアートは階級闘争の激動のるつぼの中へ大胆に進撃し、人民大衆の決起を前進させ、社帝とその「左」右の補完物の影響からプロレタリア大衆を引きはなし、革命的政治闘争へと領導しなければならない。社

りひらくためにこそブルジョアジーは、そのふところ奥深く、社会帝国主義をまねき入れた大弾圧と、いまだ革命運動とはきりはなれた状態にとどまる圧倒的多数のプロレタリア大衆への「幻惑」という政治攻撃を、し烈・巧妙に、重層的にくりひろげるのである。革命的プロレタリアートはこの現実のただなかに出撃し、日々つよまりゆく敵の攻撃がますます公然たるものとなり、粗暴化していくのに応じて、自然成長的に活性化し流動と分解をはげしくするプロレタリア大衆を、武装蜂起―プロレタリア独裁の革命の大道へと首尾一貫して牽引してゆくのでなければならぬ。だからこそこのたたかいは、帝・社帝の中間連合政府攻撃(戦争とファシズムの準備)と対決し、日帝の侵略反革命を内戦に転化せよ!という革命的・国際主義的スローガンで武装され、武装されづけられなければならないのである。

会帝国主義との全面闘争に勝利すること。彼らの権力をめぐる党派闘争の勝利的遂行へと、プロレタリア人民を武装していくこと、わが武装蜂起―プロ独にとつてこの事業は、死活をかけた第一級の問題である。この事業をどのようにたたかうのか。われわれはかかる階級闘争の現状が国際的な階級闘争の反映であり、また階級闘争が政府問題を要求することにたいして党建設・党派闘争の前進でこたえ、帝・社帝の結合による共産主義運動の排外主義的制圧―それと連動した労働運動の排外主義的制圧なる排外主義攻撃をうち破つてゆかねばならない。われわれは、そのため、レー寧の党建設・党派闘争を教訓化しなければならない。

革命の準備とプロレタリア内部の党派闘争

「ロシアの労働者階級は日和見主義のあらゆる変種と三十年にわたつて断固として闘争することなしには、自分の党をつくりあげることはできなかつた」と語つたように、レー寧とボルシェヴィキは、二〇世紀初頭の経済主義者、ブルジョア民主主義革命の嵐の時代における解党主義、第一次世界大戦期における社会排外主義、とさまざまあらわれをとる日和見主義との闘争をつうじて非合法党を建設し、プロレタリア独裁をめぐる党派闘争を基軸として、決起するプロレタリアートを独自に党のもとに組織した。

ヨーロッパではしかし、第一次帝国主義戦

烽 火

し、軍事ファシズムへ道をひらく有事立法反対」と唱した。彼らは日帝の侵略反革命を見て見ぬふりし、人民の憤激を護憲闘争へと歪曲し、ブルジョアジーの「憲法の枠内での有事立法の検討」というデマにたいし、労働者の何者であろうか。彼らはブルジョアジーの危機を「国民と国家の危機」だといい、この危機が資本主義を土台として解決可能であり、連合政権の樹立によつて解決可能であると労働者人民をあざむき、革命的プロレタリアートをしめ殺し全人民を侵略反革命とファンズムの血の海にたたきこまんとするのである。かかる社会帝国主義は、こんにち有力な同伴者をもつてゐる。右翼日和見主義者がそれである。

右翼日和見主義は革命的左翼にたいする防波堤の役割をもつて先進的プロレタリアート人民の隊列に忍びこみ、内部からたたかいを腐らせようとする。その代表的党派である革マル・四トロは、革共同主義＝トロツキズムの一国主義とスターリン主義との同伴者的弱点をますますあからさまにし、ここからして実践的に國際共産主義運動における社帝陣営に組みしている。彼らの共通の手口は日帝の危機と侵略反革命の徹底した否定であり、日帝の美化である。革マルは現下の日帝の攻撃を、日帝が米帝の「核軍事体制」にまきこまれていく過程としてとらえ、さらに日帝の政治的隠している。彼らの現在の任務＝「自衛隊増強反対運動と中ソの反プロレタリア的対応弾劾の國際反戦闘争の創造」とは、第一に彼らの口先での「反スター」の呼号とは裏腹に、「反ソ」の内容を日共と同じ土俵であらそもので、日帝の反ソ排外主義に組みするものであり、日共の実践的立場とまったくかわりないものである。第二に、日帝の侵略反革命否定と戦争恐怖にもとづく小ブル反戦闘争にばかりならず、革マルの今日の姿は新たな社帝としての登場をはつきり予告するものである。

より無邪氣であからさまな四トロは、「トロツキズムの防衛から攻勢へ」として局面を描きだし、人民の開始された流動と活性化を、本格的に社共に充りわたすべく策動を開始している。現在の日帝の攻撃を「日帝が戦後さけつづけてきた反革命の根本問題に手をつけた」とし、「社・共・ブロック下の大衆の抵抗を排除し半國家から真の帝国主義国家へ」転換する攻撃として描き、人民のたたかいを「戦後民主主義の防衛」におしこめるペテン的手口を行使しているのである。社・共との分歧を「労農人民の利益を自らの実力で守る」という自衛武装におき、かかる立場から「社・共は闘い立て！」として労働者の決起を、社・共人民戦線の一翼に売りわたすのである。

4

蜂起・プロ独の準備と組織的任務

プロレタリアートの歴史的事業にとって唯一の武器は組織である。
帝国主義心臓部におけるこんにちの革命の根本的準備＝武装蜂起＝プロレタリア独裁の準備を、革命の唯一の武器＝プロレタリアーントの中央集権非合法党建設としてなすことこそ革命的プロレタリアートのもつとも重要な任務である。

建設すべき党組織とその政治的性格

こんちにおけるプロレタリアートの組織的任務の中心は、革命の時代におけるソビエ

この過程を彼らは「政府問題が問われている」、「労農政府」の言葉で描き出しあざむくのである。すなわち彼らの「政府問題」「労農政府」こそ「中間連合政府」と寸分変わらず、かかる「中間連合政府」を改良政府とみて「この改良政府は、深まりゆく経済的危機の中で行き詰り、不可避に革命へ行きつくであろう」と巧妙なペテンをろうするのである。まさしくトロツキーの統一戦線論の現在的帰結である。さて、社帝・右翼日和見主義の以上のやり口を粉碎しつくし、彼らとの死闘に勝利するにあたつて、われわれは、革共同中核派の「内戦論」と峻別しておかなくてはならない。現在の帝国主義との攻防を「日帝の危機－侵略・反動・暗黒の攻撃－日帝の上からの内乱攻撃」に支配の軍事ボナバ再編による総力戦体制の構築」それに対する「人民の活性化－先端における内乱の開始－社共のブレーク化」として描きだす。そしてまたかかる階級情勢こそ「三〇年代のらせん的回帰」であるとし、党の任務を「三〇年代の敗北の突破」にもとめ、その突破を開拓された「内戦」の戦術的領導「民間反革命のせん滅」におくのである。彼らの「反ファシズム解放戦争」と「先制的内戦戦略」こそかかる任務の具体化であり、「日本革命運動がついに到達した闘争形態」とされる。革命的情勢の端緒がきりひらかれ階級闘争が内戦として萌芽的に発展しはじめたこと－このことは、しかしそれを領導すべき党の任務として何が要求されているのかにこたえることぬきにありえない。この点でまず彼らの決定的な弱点は、現代過渡期世界における社帝の巨大な反革命的役割を見ぬけず武装解除している点にある。現情勢は中核派のいうがごとく三〇年代の回復再現ではありえない。帝国主義はスターリン主義を全世界的な規模で、社会帝国主義として育成することを条件にして延命をとげた。國際共産主義運動は、これとの死闘をつうじてのみ前進

してきたのである。したがつて社帝への批判・闘争が「人民のたたかいへのブレーク」でことたりとされではならず、また「カクマルとの闘争の延長線上の課題」としてそれ代替されるべきものではありえない。事実、帝国主義の中間連合政府－ファシズムの攻撃は、社会帝国主義・右翼日和見主義をまきこみ、その一翼にしたがえてうちおろされて打倒にむけた暴動の総和に結果し、敗北の道をたどるしかないことをまた三〇年代の共産主義運動の教訓である。いかなる政治的性格と任務をもつ権力を樹立するのか、このことを鮮明にし、そのもとに革命的プロレタリアートの隊列を首尾一貫して打ちきたえ、武装していかねばならない。すなわち権力をめぐる闘争として、階級闘争を首尾一貫して指導し、日帝打倒を世界党・世界プロ独をめぐる国際党派闘争と固く結合してたたかいとる指導が、決定的に要求されるのである。中核派はこの最も重要なたたかいにたいする日和見主義である。三〇年代の敗北を世界党建設から総括するのではなく、反帝闘争の枠内での戦術問題として総括する結果、「反ファシズム解放闘争」の実践にもかかわらず、社共人民戦線の戦術左派からみずからを峻別できず、また「中間連合政府」攻撃と全面的にたたかうことができないのである。これは彼らの反スターリン・一国主義の政治的帰結である。

同志諸君！現代過渡期世界における、われわれの党派闘争上の任務と直面する党派闘争は以上のごとくである。断固として、そして大胆に、世界党建設と世界プロ独に武装されたわが革命的政治闘争の旗を鮮明にし、階級深部における社帝・右翼日和見主義との死闘に勝利しようではないか。

「党建設－階級形成の二元論、党組織と階級組織の二元的分離」なる日和見主義は、レーニンとボルシェヴィキ党の党建設戦の立場－党建設の目的意識的な、階級闘争の自然成長性からの峻別のたたかいにたいするスターリン主義の経済主義的歪曲にその発生の根拠をもつてゐる。スターリン主義は、レーニンの政治闘争の経済闘争からの峻別のたたかいを、「政治闘争と経済闘争の永遠の分離」と

して、反レーニン主義的に定式化した。このスター・リン主義における根本的な経済主義は、スターリン主義の組織に反映し、彼らの組織に関する経済主義的定式をも生みだしたのである。革命的プロレタリアートは、反レーニン主義組織の末路が、スター・リン主義組織論の根本的な性格—階級闘争の道具としての党論、したがって、階級闘争主体としてのプロレタリアートが階級闘争の道具へと転落し、階級闘争の道具としての労働者の国家が、階級闘争の主体へと自己目的化するところの、根本的な転落にいきつくことははつきりと暴露しなければならない。

レーニン主義は、右翼日和見主義との党組織—プロレタリアの組織をめぐるたたかい、およびトロツキー主義とのこの面でのたかいで通じて、その戦取すべき組織を鮮明にしてきた。それは、右翼日和見主義の、自然成長性に党組織建設をゆだねようとするくわだて、および、そのもとも戦闘化した表現たる「階級の最高の団結の質と形をソビエトにおしとどめ、党の任務を、ソビエトの指導機関におしとどめようとする」トロツキー主義とのたたかいであった。レーニン主義中央集権非合法党路線と、その基本組織—中央委員会・細胞の建設戦は、このトロツキー・スター・リン主義の同根の日和見主義との今日的闘争によつてしか勝利することはできない。それは、断固たる、自然発生性からのプロレタリアートの革命的目的意識性の峻別であり、この峻別された階級の目的意識性が現実の階級の自然発生的諸決起と結合し、これを革命的決起へと飛躍させることに規準づけられる共産主義者同盟(全国委員会)は、その三〇一号路線戦取のための現代カウツキー主義との分派闘争のルツボのなかからわが国における革命的プロレタリアートの中央集権非合法党組織の政治的実践的性格を、「党的武装蜂起—党のプロ独」として確立すべきことを鮮明にしてきた。

一九〇五年の巨大な革命的決起と、いったんのその敗北を、中央集権非合法党の建設戦へ転化せんとしたレーニンとボルシェビキ党は、その闘争の中軸を、右翼日和見主義者とのプロ独をめぐる路線闘争にしつかりとさだめることによってはじめて一七年への主体的準備をかちとることができた。『レーニンは、プロレタリアートの独裁をプロレタリアートへの独裁と混同している』『レーニンの見解は、マルクスのそれではなく、バーネンのそれがである』(ブレハーノフ)党は党組織により、党組織は党中央委員会により、そして結局は、党中央委員会は独裁者によっておきかえられる『それはプロレタリアートに対する独裁である』(トロツキー)レーニンの党建設—「党的武装蜂起・党的プロ独」にたいする右翼日

和見主義の見地は、ここにもつとも端的にみてとれる。

かつてマルクスは次のようにいった。「階級闘争は必然的にプロ独へみちびくということ、この独裁そのものは、いつさいの階級の廃絶と無階級社会とにいたる過渡をなすにすぎないということ、これである」「資本主義社会と共産主義社会のあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照應してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家はプロレタリア階級の革命的独裁以外のなものもありえない」と。あらゆるエセマルクス主義者は、このマルクスの「必然的にみちびく」「過渡をなすにすぎない」を、自然成長的・法則的なものへと転落させ、一方では「革命的転化」をまったくの空語にするのをもつて、こんにちの社会帝国主義による「プロ独の放棄」にまでいたっている。

革命的プロレタリアートは、注意をもつて、この社帝と同根の転落が、レーニン主義を標榜する日和見主義者の見解のなかに存在していることをはつきりと暴露しなければならない。経済的単位としてのプロレタリアートの無媒介なプロ独に、党により組織される目的意識的なプロ独をすりかえていること。それは、トロツキー・スター・リンの同根の反レーニン主義であるところの、プロ独を党の問題とせず、革命的高揚期における大衆の自然発生性の最高の組織である「ソビエト」の独裁としてみる誤りに根拠をもつていていたのだ。レーニンは、このような党建設とプロ独を分離する見地と激しくたたかった。それは、プロ独を、権力奪取後の問題へときりちぢめるのではなく、現実の党の階級闘争指導任務と、そのための党建設問題におけるプロ独といふ、こんにちの路線的実践問題としてとらえたためであった。党建設とプロ独を分離しない主義者は、プロ独を武装蜂起ときりはなすこと、がまつたくできないことを確信するがゆえに、「党的武装蜂起—党的プロ独」として、その路線の根幹を確立しなければならないのであるが、それはこんにちにおけるスター・リン主義社帝—右翼日和見主義との全面的党派闘争とみずから党建設をないきることのなかにのみ実践化されるのだ。

トロツキーのプロレタリア組織論の根底にひそむソビエト主義は、戦術上の差異をのりこえて、結局は、スター・リンによるプロ独のソビエト主義的定式化にのみこまれてしまふのである。ソビエト的団結と形態に革命の主体を下落させ、プロレタリアートの党をその道具—指導機関であるとするスター・リン主義は、いかに同情的にみようとも、プロ独を、ソビエト的團結形態の発展としての一国における労働者権力の形態と、その政策の問題にきりちぢめ、現実のプロレタリア大衆の参加をしや断し、階級闘争の内実としてのプロ独

—権力奪取後、その権力を道具として組織される最も激烈なブルジョアジーと資本主義にたいするプロレタリアートの階級闘争—を否定するのである。プロ独は、革命への準備期と権力奪取後をつらぬくブルジョアジーと資本主義の暴力的打倒という階級闘争の性格の問題である。それは、革命の準備期と権力奪取後をつらぬいて、プロレタリアートの前衛党とプロレタリア大衆の直接的結合という、党による目的意識的な階級闘争指導の任務の問題である。

一国における労働者権力は、その道具である。ゆえに、一国権力は世界革命—世界プロ独立のための世界的階級闘争の道具として直接的に展開しなければならないというレーニン主義者の確信は、現代過渡期世界におけるプロレタリア独裁をめぐる最大の党派闘争の内実となねばならない。

したがって「党的武装蜂起—党的プロレタリア独裁」なるプロレタリアートの組織建設の政治的・実践的性格こそ、武装蜂起—プロレタリア独裁をプロレタリア大衆の最も主体的なたたかいへとうちだすものなのである。そのたたかいこそ、階級闘争の深部に中央集権非合法党細胞を武装蜂起—プロレタリア独裁の指令部として建設することなのである。

党による大衆の決起の

領導と革命の伝導路

共産主義者同盟(全国委員会)は、七八年初頭『烽火』三一四号をもつて、『武装せる革命の伝導路』建設戦を全プロレタリア人民のまえに提起した。中央集権非合法党のもとでソビエトの建設と現下の労働運動・個々の階級闘争を結合する革命的プロレタリアートの目的意識的指導の組織的側面である。七八年のソビエトの建設と現下の労働運動・個々の階級闘争の全般的状況は、この面におけるプロレタリアートの意識的な決起がますます強く要求されていることを、だれの目にも鮮明にした。

革命への目的意識性は、戦場のただなかに送りこまれた中央集権非合法党の細胞と先進的プロレタリアートのかたい結合なくして、さらには細胞のまわりに結集した先進的プロレタリアートが、さらにおおくの大衆と結合することなくして、またかくして形成される「武装せる革命の伝導路」なくして、わが国の階級闘争を革命闘争へと転化させる力とはなりえないのだ。「武装せる革命の伝導路」、これこそ大衆を革命的プロレタリアートへと建設するための党の事業の最も系統的組織的要であり、それは同時に、大衆をして、その階級的英雄性の全能力を發揮させ、全力をあげて階級闘争の広大な戦場に展開せしめるための「革命の組織」なのである。

それゆえこそわれわれが構築すべき「革

命の伝導路」は、なによりも大衆の政治的前衛として建設されねばならない。

それは第一に、革命的プロレタリアートのもつとも系統的な、現実の大衆の自然発生的決起、現実の大衆がおりなす支配との闘争の深部への政治的突撃の成果としてしか建設されることはありえない。大衆の政治的前衛としての任務遂行は、大衆の決起、その経済的政治的民主主義的決起のいっさいを、ねばりづよく、系統的に、この現下の帝・社帝の攻撃への真正面からの反撃戦へと領導することにしつかりと基礎づけられねばならない。

貧困と失業が生きんがため、食わんがためのたたかいへと人民をうねりのごとく燃えたせている。人民の血をもどめる侵略反革命戦争の軍靴のひびきが、広範な人民を、「戦争とファシズム」へのたたかいへと決起せしめていく。全力をあげて、人民のこのたたかいを領導せよ。このうねりを中間連合政府——死せるブルジョア民主主義の幻想へとおとしこめんとする社会帝国主義・右翼日和見主義の影響から、全力をあげて人民をときはなれ。工場のなかへ学園のなかへ、未組織労働者のなかへ、労働組合のなかへ、農民の決起のただなかへ、すべての革命的プロレタリアートは大衆の要求をさしめせ。彼らのたたかいの勝利と敗北の総括を個々のたたかいの分散性。個別性の突破へと、全被抑圧人民を代表するプロレタリアートの苦闘の全過程は、右翼日和見主義・経済主義者の本性、政治闘争の経済闘争からの永遠の分離なるくわだてを粉碎し、日本アーティアートの国際主義に武装された革命的政治闘争にはつきりと焦点づけられる。それは同時に現実のプロレタリア大衆の状態をしつかりみすえたところの、系統的な、もつともねばりづよい大衆の政治的前衛の実践である。

第二に、大衆の政治的前衛としての「革命の伝導路」は、公然たる領域を最大限に活用しうる非合法組織として建設されなければならぬということである。

そしてその第三は「革命の伝導路」は、軍事組織すなわち「武装せる革命の伝導路」としてみずからを建設しなければならない。このためにこそわれわれは、非合法組織の建設、軍事組織の建設から大衆を永遠に分離させんとする右翼日和見主義とたたかい、そのたたかいのなかから、これを大衆みずからのものとしていくでなければならぬ。右翼日和見主義、そのゆきつくところのゼネスト革命路線は、プロレタリア階級の革命の組

織を、労働組合の戦闘化、自然発生的ソビエトの団結におしとどめ、プロレタリアートの革命的決起を、社会帝国主義・社・共の尻押し、中間連合政府の補完物へと転落させようとする。四トロに代表されるこの組織上の右翼日和見主義は、階級の最高の団結を、党ではなく、自然発生的ソビエトに希求し、党を、そのソビエトの援助、指導機関にきりちぢめようとするトロツキーの、レーニン組織論への右翼反対派の立場の無批判な繼承のなかに基礎づけられる。

プロレタリアートの経済闘争の必然的團結形態である労働組合は、こんにちにおいても、そしてプロロ独期においても、もつとも広範な大衆の最初の團結形態であり、プロレタリアートは、労働組合運動のなかでその最初の階級的自覚をえるであろうこと。革命的プロレタリアートは、労働組合の運動を「共産主義の学校」へと転化することをもって、労組内に根をはる右翼日和見主義をたたきだし、大衆の圧倒的部力を革命の味方に組織しなければならないことはわれわれの確信とするところである。しかしまず第一に、いかに戦闘化しようとも、労働組合の團結が、プロレタリアートの革命の組織——赤軍とソビエトの任務を代行しないことは、単に歴史の教えるところのみならず、ブルジョア選挙に運命をまかせる平和革命を信じる者以外にとつては、その團結の本質からして明白なことである。

第二に、プロレタリアートの自然成長的團結の最高の形態としてのソビエトといえども、労働組合的團結の圈内で自然成長することはけつしてありえず、労働組合的團結の外部に、労働組合的團結形態の限界の外部に、革命の機関たるソビエトを建設するための飛躍をおこしとどめることに、その党的本質が存在する。われわれは、プロレタリア人民の労働組合的團結の形成を、全力をあげて支援する。そして、労働組合のたたかいを、全力をもつて支援する。しかし、そのたたかいの内部から決起する先進的プロレタリアートをわれわれは、独自の政治的組織へと領導しなければならない。それは、労働組合的團結の内部に存在し、その團結の領導力でありながら、はるかに遠大な、はるかに広い任務に目覚めたプロレタリアートの独自の組織として建設されねばならないのだ。

建設されるべきこのような「革命の伝導路」は、その政治的前衛としての本性を、現実の敵国家権力、反革命党派との戦闘に耐えぬきつつ、公然と人民の前衛をにぎるために、

なによりも非合法組織として、同時に軍事組織としてみずからを建設していかねばならない。階級闘争のうねりを、革命の劫火へと転化すべきプロレタリアートの活動にとって、それは、個別資本の暴力的支配、帝国主義の手代・社会帝国主義の暴力的支配、日帝国家権力・政治警察の組織破壊、白色テロルとの二時間の戦闘には、いささかも成立しない。

たたかうプロレタリアートは、みずから組織とその運動を、反革命暴力との勝利的戦闘遂行のなかからしか發展させることはできない。この面でのたたかいは、具体的な非合法、非公然活動能力、みずから組織とその運動を、反革命暴力の包囲と攻撃から防衛しこれを打倒しうる具体的な軍事能力として獲得してゆくことにある。

この時、レーニンが、一九〇五年決戦の準備期に、合法マルクス主義の主張する「労働者の諸組織をつつみこむ党」を批判し、非法黨の構築すべき大衆との結合の形を「労働者の諸組織によつてづつまれた党」としたたかがはつきりと継承されなければならない。非合法党建設の最大の課題、それが革命の事業に耐えうるレーニン主義非合法党であるかどうかの区別は、プロレタリアートのもうとも公然たる政治的前衛として建設されていられるかどうかにかかわる。われわれは、大胆に、公然とプロレタリアートの政治的領導者としてたちあらわれねばならない。そうせずして、いかにして、先進的なプロレタリアートを、公然に周囲に結集させることができるだろうか。さらには、先進的プロレタリアートを、公然に周囲に結集させることができると、大胆に大衆の前衛として展開させずして、どうして、彼らの周囲に無数の大衆を結集せしめることができるだろうか。このようにして戦取された非合法細胞と大衆の結合こそ、「武装せる革命の伝導路」なのだ。

革命の伝導路とソビエト・赤軍の今日的準備

ソビエトは革命家によつて「発明」されたものでもなければ共産主義者の組織でもない。それは、フランス革命のルツボのなかから自然発生してきた革命的大衆の團結である。共産主義者がこれにつけてわえたものは、これが打倒されるべきブルジョアジーの政治権力にかわるプロレタリア人民の政治権力形態であることを「発見」したこと。これがプロレタリア人民の「革命の組織」、そのもつとも大衆的なものとして指導されねばならないということを歴史の教訓から学んだこと。これ高に発展した團結であり、その團結の内部に武装蜂起とプロロ独の機関としての形と質を自然発生的に内包して革命の高揚期に形成されていく。しかし、それはどこまでも自然成長

烽火

的であり、けつして自然成長の直接延長上に蜂起—プロ独の勝利をないきる質と形が形成されるなどといさかも夢想することはできない。

四トロを筆頭に、今日のソビエト主義者は、結局、労働組合のなかにソビエトを転落させ、プロレタリアートの計画された全国一斉武装蜂起と内戦を、蜂起と内戦の一補完戦術にすぎないゼネストと、階級闘争高揚の自然発生的状況にすぎない暴動に転落させる。そして、世界革命・世界プロ独へと転化させるべき機関である一国の革命政府と赤軍を、ソビエトの統一戦線政策と、ソビエトの武装と戦闘由に転落させることを、その路線的、政治的目的としている。

われわれは、「武装せる革命の伝導路」建設の路線的勝利のために、まず、ソビエトの形成と世界革命に関する路線的立場を鮮明にしなければならない。

それは第一に、ソビエトを蜂起—プロ独の機関II臨時革命政府として建設しなければならないというレーニン主義であり、第二に、臨時革命政府、すなわち、一国における労働者政府権力を、世界革命の機関、世界プロ独の一構成部分として建設しなければならないというレーニン主義である。スターリン主義は、一七年革命によって樹立されたソビエト権力を、世界革命の機関へと発展させることではなく、一国権力の国家体制のなかに閉殺した。それは、ソビエトのもつ、地域的、階層的保守性、防衛主義的限界へのスターリン主義の拝跪・屈服の帰結にはかならない。

そして、世界革命の勝利、共産主義の建設にまで、一刻の休止もなく不斷に組織され、不斷に指導されねばならない。革命運動のもとも大衆的な団結としてのソビエト的団結とともに大衆的保守性、防衛主義的限界へのスターリン主義の拝跪・屈服の帰結にはかならない。

このレーニン主義の断固たる路線は、ソビエト建設における日和見主義者とのもつとも厳格な党派闘争とソビエト建設における「大衆の統一戦線」の首尾一貫した党による領導をもつて、はじめて実践的なものとなりうる。右翼日和見主義者は、前衛党建設と革命的政治闘争にたいする自己の妨害物としての本性を隠蔽するために「統一戦線」を口にする。そしてそのいきつく先、四トロに代表される「社共は労農政府を樹立せよ!」をあたかも、レーニンの統一戦線戦術だといいくるめる。彼らにとつてはスターイン主義さえ、統一戦線に反対する党派主義者に見えるのだろう。まったくの反対である。スターイン主義こそが、レーニンの統一戦線戦術を、プロレタリアートの党建設戦の代行物へ、人民の革命的人であり、こんにちの右翼日和見主義者の「統一戦線戦術」なるものとの厳格な党派闘争と

結合してこのたたかいは、すすめねばならぬい。

一九二一年コミニテルン第三回大会を焦点に、レーニンは、統一戦線戦術の必要をするべくうちだした。それは、「左翼小兒病」批判の見地においては「何をなすべきか」と、きりはなしえなく結合した「左翼小兒病」と、世界党建設にさいしてうちだされた「二一ヶ条の加入条件」ときりはなし。

えないので労働運動指導の戦術であった。レーニン自身がのちにみずから統一戦線戦術を括して「これらの大衆が資本とたかうのを援助するため、彼らが国際経済全体と、国際政治全体における『敵の戦線』の巧妙なしくみを理解するのをたすけるために、一敵の改良主義的戦術が誤っており、革命的戦術が正しいことを労働者に納得させたいがゆえにわれわれは統一戦線戦術を採用したのである」(一九二二年「われわれは払いすぎた」と)といつているとおりである。

レーニンにおける、この見地は、レーニンの直接指導下ではなかつたとはい、コミニテルン四回大会(一九二二年)決議において

「自由主義的労働者政府、社会民主主義的労働者政府権力を、世界革命の機関、世界プロ

独の一構成部分として建設しなければならない」というレーニン主義である。スターリン主義は、一七年革命によって樹立されたソビエト権力を、世界革命の機関へと発展させることではなく、一国権力の国家体制のなかに閉殺した。それは、ソビエトのもつ、地域的、階層的保守性、防衛主義的限界へのスターリン主義の拝跪・屈服の帰結にはかならない。

そして、世界革命の勝利、共産主義の建設にまで、一刻の休止もなく不斷に組織され、不斷に指導されねばならない。革命運動のもとも大衆的な団結としてのソビエト的団結とともに大衆的保守性、防衛主義的限界へのスターリン主義の拝跪・屈服の帰結にはかならない。

このレーニン主義の断固たる路線は、ソビエト建設における日和見主義者とのもつとも厳格な党派闘争とソビエト建設における「大衆の統一戦線」の首尾一貫した党による领导をもつて、はじめて実践的なものとなりうる。右翼日和見主義者は、前衛党建設と革命的政治闘争にたいする自己の妨害物としての本性を隠蔽するために「統一戦線」を口にする。そしてそのいきつく先、四トロに代表される「社共は労農政府を樹立せよ!」をあたかも、レーニンの統一戦線戦術だといいくるめる。彼らにとつてはスターイン主義さえ、統一戦線に反対する党派主義者に見えるのだろう。まったくの反対である。スターイン主義こそが、レーニンの統一戦線戦術を、プロレタリアートの党建設戦の代行物へ、人民の革命的人であり、こんにちの右翼日和見主義者の「統一戦線戦術」なるものとの厳格な党派闘争と

りかえをもつて「コミニテルン内の日和見主義分子は、労働者と農民の政府ということを、ブルジョア民主主義の枠内の政府、社会民主主義との政治的同盟と解釈して、これをやがめようとしてきた。コミニテルン第五回大会は、断固としてこうした解釈をしりぞけた。コミニテルンにとって、労働者と農民の政府というスローガンは、革命の用語として批判の見地に立った、労働運動における統一戦線戦術の必要であった。それは、レーニン主義という見地においては「何をなすべきか」と、きりはなしえなく結合した「左翼小兒病」批判の見地においては「何をなすべきか」と、きりはなしえなく結合した「左翼小兒病」と、世界党建設にさいしてうちだされた「二一ヶ条の加入条件」ときりはなし。

えないので労働運動指導の戦術であった。レーニン自身がのちにみずから統一戦線戦術を括して、その御用学者に「人民戦線政策」であり、世界党建設にさいしてうちだされた「二一ヶ条の加入条件」ときりはなし。われわれは統一戦線戦術を採用したのである」(一九三五年コミニテルン七回大会人民戦線政策)といい、さらには、「人民戦線政策は、十年後にプロレタリア独裁を総括して、その御用学者に「人民戦線政策は：：共産主義者が資本主義の枠内で民主的な政府をつくるためにはたらくということとを意味し：：：七回大会で明確にうちだされた人民戦線政策は、十年後にプロレタリア独裁の新しい形態(人民民主主義)に発展する結果となる」といわしめ、全面的なレーニン主義統一戦線戦術の路線的改革へとなだれおちていったのである。

もはや、こんにちの日和見主義者の「統一戦線の説教」が、なぜ革命的プロレタリアトによって粉碎されねばならないかは明白であろう。

しかし最後にわれわれは、次の一、すな

わち、日和見主義者の統一戦線が革命的プロレタリアートの戦取すべき組織、司令部としての前衛党細胞とそのもとでの「武装せる革

命の伝導路」を「党的ボルシエビキ化」なる

革命の出発点たる役割をはたしう」とその革

命的戦術との区別をはつきりとさせ、統一戦

線IIプロ独なる転落とはまったくあい入れない。：：：共産主義者の参加した労働者政

府、共産党だけで、純粋な形でつくりうる本

当のプロレタリア的労働者政府さえプロレタリア独裁ではなく、またプロ独にむかう歴史

的に不可避な過渡形態の政府でもない。ただこれがつくられた場合には、独裁のための闘争の出発点たる役割をはたしう」とその革

命的戦術との区別をはつきりとさせ、統一戦

線IIプロ独なる転落とはまったくあい入れないものであった。統一戦線は、第一にその広範な労働運動全体にさししめす独自の革命的

政治闘争のスローガンと、第二に樹立すべき

革命政府の性格と任務(プロ独)をこの統一戦

線のなかに溶解させないこと。第三にプロレ

タリアートの前衛党組織をこの統一戦線のなかに解体しないことを不可避の条件としたうえでの戦術なのである。

まさにスターイン主義は、この点において統一戦線を反レーニン主義にまで転倒させた。

烽 火

ばならないのだ。ここに「武装せる革命の伝導路」の第一の路線的任務を高くかかげて、われわれは前進するのである。

「武装せる革命の伝導路」建設戦における、革命的、先進的プロレタリアートの第二の路線的任務は、みずから団結を、赤軍＝革命の軍隊の建設に、しっかりと焦点づけることである。

もつとも露骨な社会帝国主義者をのぞき、いささかも社会主義を口にするものには、もはやプロレタリアートの武装を否定しようとするものはない。それは帝国主義の侵略反革命攻撃のもつ暴力性が、いまやだれの目にもおおいやすくことのできないものとなり、プロレタリアートの反撃の合法的領域が、ますます急速にせばめられているといふ現下の階級闘争の全体的状況、階級戦争としての性格をますます鮮明にせざるをえないという現状の反映である。だから現下の革命的危機を主体的にきりひらかんとする革命的プロレタリアートは、「プロレタリアートの武装」というスローガン一般を、革命の軍隊＝赤軍の建設に関するみずかららの任務にまで発展させ、そうすることによって、「プロレタリアートの武装」一般のなかにかくれこむあらゆる日和見主義をあばきださねばならない。このたたかいは、一九〇五年の大激動にさいし発せられた「革命軍」と革命政府、これは一個のメダルの両面である。これは蜂起の成功のために、そして蜂起の成果の確立のために、同じように必要な二つの機関である。これは唯一の徹底的な革命的スローガンとして、かならず提起され、解明されねばならない二つのスローガンである（一九〇五年「革命軍と革命政府」というレーニンの見地に立脚してなされねばならない）。

武装蜂起をはじめて考えるものにとって、プロレタリア大衆の武装——その最も成熟したものであるソビエトの武装は、蜂起の成功のための不可欠の条件である。にもかかわらず、フランス革命以来のあらゆる革命の教訓は、近代的なブルジョア国家暴力装置打倒のためのプロレタリアートの武装がソビエトの武装にとどまる限り、かならず惨敗することを教えている。もつともかたく階級的、政治的團結を内包した革命の正規軍＝赤軍が建設されねばならない。それはソビエトの武装が、ソビエトのもつ組織的本性そのものの限界ゆえに、民兵としての地域的・単産的・防衛的軍事力という限界をもつからである。

この点を戦取した革命的プロレタリアートの「革命軍建設スローガン」の解明の次にたかいは、いかにして、この「革命軍」を建設するかに定められねばならない。ソビエトからの動員、國家軍内の反乱兵の組織化、臨時革命政府権力による国民の強制徴兵と共に、党員の大量編入といふ革命時のロシア赤軍建設をみてもあきらかなように、赤軍の建設こ

そは、長期にわたる党の計画的な準備が、革命的危機の成熟という条件のなかで、あたかも長い経路をたどってきた導火線の火が、ついに火薬に達するよう、まるで「一挙的」に実態化するかに見える長期的な事業なのである。だからわれわれは、赤軍を建設しうるのは、ただ党的目的意識的な努力であること、そもそもとに結集する先進的プロレタリアートの目的意識的な長期的努力であることを、まず鮮明にしなければならないのだ。『党的軍隊』なるスローガンは直面する革命が必要とする赤軍の政治的性格を明らかにしているのであり、同時に、赤軍建設を、自然発生性にゆだねようとするものとのたたかいのスローガンなのである。

スターリンの軍事路線は「ソビエト国家権力の暴力装置、その建設と発動」である。これが全体的規定であり、その帰結は、ソビエト国家軍と治安警察の二元である。このスターリン軍事路線、したがって、赤軍の政治的性格に関する反レーニン主義は、次の路線上、理論上の反レーニン主義の集約である。クラウゼヴィツ軍事理論テーゼ「戦争は他の手段をもつてする政治の継続にすぎない」のレーニンによるマルクス主義的批判摄取は「権力奪取のための政治闘争の最高の発展としての武装蜂起」「ブルジョアジーにたいする世界的追撃戦」としても激しい階級闘争の一時代であるプロレタリア独裁なる当面するることに、必要とされる赤軍の階級闘争任務を定めることであった。それはスターリン主義と、その発展転化物であるソ連社帝の立場「軍事は政治に従属する。赤軍は政治的遂行のための技術的、物理的機能である」と真正面から対立する。なぜならこのような見地こそレーニン主義の革命の軍事と赤軍から、階級闘争という性格をぬき、ブルジョア軍事理論であるクラウゼヴィツにもどること以外なものでもないからである。この反レーニン主義は先に述べた、階級的團結の最高の質と形である党の否定、ソビエト主義組織論と結合して、階級闘争としての革命戦争と、先進的プロレタリアートの、階級闘争の最高の部隊として党によって組織され指導される赤軍を、国家政治目的完遂のための戦争とその暴力機関に解体することにいきつく。

ロシナ革命の世界革命への発展を、ソ連国家の防衛、経済的・政治的利益の追及に解体し世界赤軍へと発展すべきロシナ革命の赤軍を、ソ連国家軍に解体しきったこんにちのソ連社帝は、スターリン主義の末路である。

また革命の軍事と、革命の軍隊のこの全面的な否定は、こんに先進国社会帝国主義の共通の本性であり、この本性を見ぬくがゆえに、ブルジョアジーは、資本主義と国家の

温存を確信して、政治権力を、彼らと共有する用意のあることをほのめかしもするのである。

スターリン主義を根本的に批判しえないがゆえに、レーニン主義をその組織論においても、革命論においても継承しえない、革共同中核派は、「プロレタリアートの武装」という側面においても、また敵としてスターリン主義の枠内にすることが批判されねばならない。彼らはいう。「ブルジョア国家権力、さらにはスターリン主義国家権力、または、革命的労働者国家においては、軍隊は国家権力の実体的構成部分として、軍隊としての軍隊を形成しうるのであるが、革命党における軍隊は、権力奪取にいたるまで、建党を基軸的媒介としてはじめて形成しうるのである」と。ここにはまず、結論的に、軍隊そのものが階級闘争の主体であり、革命の継起する諸段階、蜂起＝プロ独立世界革命＝共産主義の全過程における階級闘争の政治的発動と結果の総体をもつとも主体的にないきる先進的プロレタリアートの階級部隊であるという、赤軍の他の軍隊とは異なる政治的性格が否定されている。中核派のごとく、赤軍建設を権力奪取までは党が媒介し、権力奪取後はそれを国家権力機構化するとするのではなく、権力奪取後こそ、ますます党の直轄指導する赤軍として、革命の軍隊として指導されねばならないのだ。中核派のこの結論的転落は、「革命党は共産主義者の政治的結集体である」なる反レーニン主義党組織論と結合して、赤軍建設へといたるこんにちの党と先進的プロレタリアートの軍事的準備を政治と軍事の二元、党・階級形成と軍隊形成の二元へと転落させることとつながる。

もはやわれわれのなすべきことは明らかである。赤軍の今日的準備戦は、中央集権非合法党の基本組織を軍事組織として建設すること、先進的プロレタリアートの革命の伝導路を軍事組織として武装すること、ここにこそその実践を立脚させねばならないのである。

革命の危機への移行の時期——いま七九年が始まった。この全時期にわたる革命の根本的準備をただちに開始せよ。帝・社帝の中間連合政府攻撃による階級闘争の排外主義的組織化、反革命制圧と不屈・非妥協にたたかいぬき、侵略反革命を内戦に転化する鉄のレーニン主義党建設の歴史的事業に全プロレタリア人民は結集せよ。人民の自然発生的な決起して、そして組織者として、さあ突撃せん。系統的に頑強に忍耐づよく、大衆の内部から革命への鮮明な水路をきりびらこう。共産主義者同盟(全国委員会)とともに、七九年を進むせん。

新たにたたかいで決意し

ひめゆり!! 白銀四戦士 奪還勝利集会、つちぬく

去る九月十八日、姫百合戦士・知念功氏はついにわれわれのもとへ奪還された。一昨年、十・三・控訴棄却・反革命判決、そして獄中転向攻撃など、七・一七闘争の成果を破壊しつくさんとする日帝をかたく確認し、ともに新たにたたかいで決起されることを訴える。知念氏を戦列にくわえ、「七・一七闘争を支持する会」は、十・三・沖縄、十一・二五関西、十二・三関東と、沖縄・「本土」をつらぬいて、姫百合・白銀四戦士奪還勝利/CTS建設阻止/決起集会をうちねいた。

たな段階を、沖縄・「本土」の

関 西

十一・二五関西集会は、沖縄より知念功氏をむかえ、「支持する会」を先頭にした在関西沖縄青年、おっちゃん、おばちゃん、そして闘う労働者、学生によつて会場が埋めつくされる結集によつて闘いとられた。金武湾CTS闘争のスライド上映をもつて集会は開始された。「金武湾を守る会」結成以来の激しい闘いのひとコマひとコマが集会参加者の胸をうち、タング本体工事着工を目前にひかえ緊迫する沖縄現地のたたかいへの熱い連帯の熱氣につつまれる。

開会宣言をうけ、あいさつに立つた知念氏は、三年有余の獄中闘争を貫徹し九月十八日に出獄したこととを報告する。そして「沖解同を先頭にした七・一七闘争の発展は、日米侵略体制の強化と対決するなかでかちとれる。『本土』と沖縄現地の闘いは沖縄解放闘争の両輪だ。とともに沖縄・奄美・「本土」をつらぬいてCTS闘争を闘おう」と提起し圧倒的な拍手で確認された。そして白銀戦士小林氏のアピールがよせられ、金城実氏の講演に移った。金城氏は沖縄戦における大虐殺にふれ、沖縄解放闘争の原点を鮮明に提起する。つづいて支持する会からの基調提起がなされた。基調は七・一七闘争の歴史的意義を鮮明に提起し、七・一七闘争が復帰協運動の階級



沖縄解放闘争の前進へ(11/25)

すべての労働者人民諸君ノ七・一七闘争の成果は不滅である。知念氏の奪還をもつてよいよ新しい闘いに断固としてふみださなければならぬ。十月(12月)、沖縄・「本土」をつらぬいてうちぬかれた集会はそこの基礎をうちかためた。日帝の朝鮮侵略反革命戦争とファシズムの準備と対決し、「日帝の朝鮮侵略反革命

労働者人民の団結で「安保粉碎ノ日帝打倒ノ沖縄解放ノ」という国際主義につけられた日帝の戦線復帰宣言を断固として確認し、実氏、桑原重夫氏よりのアピールをさせ、最後に関東沖解同よりの決意が問われていることをかたく確認した。そして全参加者から今後のたたかいにむけた提起をうけ、真剣な論議が行なわれた。



く武装蜂起一プロ独に勝利せよ！」と闘いの前進方向を鮮明にさしめ、沖縄労働者人民とともに最後まで闘う決意を熱烈に提起する。集会の最後に決意表明にたつた関西支持と闘う会の代表は、三年余の闘いのいのち建設の前進へと発展させると断固として提起し、会場ゆるがす「異議なし！」の声で確認された。

また、関東においては十二月三日、関東決起集会が開催された。知念功氏、そして姫百合・白銀戦士、小林・川野両氏のアピールをうけ、集会は沖縄・「本土」をつらぬく集会のしめくくりにふさわしい熱気のもとにたたかいつらねた。関東沖解同から新里金福氏、知念政光氏、さらにこのかんともにCTS闘争をたたかっている奄美青年同盟(準)より連帶のアピールがなされた。そして沖縄集会が権力との対峙下、圧倒的にたたかいとられた。集会は知念氏・関西支持する会の決意表明、金城の戦線復帰宣言を断固として確認し、実氏、桑原重夫氏よりのアピールをさせ、最後に関東沖解同よりの決意表明を全体で確認し、今後の前進を誓いあつた。われわれはこの集会の先頭にたつとともに、昨年九月末「反CTSをたたかう沖縄・奄美・「本土」実行委」に結集し、CTS闘争の連続決起を実現し、七・一七闘争の継承・発展のたたかいをになつたことを報告しておきたい。

関 東



侵略反革命戦争への国民総動員の道、 有事立法粉碎をかけ進撃かちとる

集会のトップをきつておこなわれた基調提起をうけ、三里塚闘争

勝利京都産大実行委、電通労政など、結集した各戦線からの熱い決意が表明される。つづいて、関東、差別判決四ヶ年糾弾・狭山再審闘争、三里塚、沖縄の地で单一の基軸に争勝利中央闘争に勇躍決起し、たたかいぬいたこと

を報告する。日帝一国家権力の狭山再審却下―石川獄死攻撃を粉碎すべく、全国津々浦々から二万有余の部民が、そしてはるか北総の地より三里塚反対同盟が結集した。七四年十

・三一、七七年八・九上告棄却とうちづく日帝一ブルジョアジーの道ス黒い野望にたい

10/31 融和主義に二万の痛打 狹山

再審勝利に総決起

わが反帝戦線は、十・三一寺尾死攻撃を粉碎すべく、全国津々浦々から二万有余の部民が、そしてはるか北総の地より三里塚反対同盟が結集した。七四年十

・三一、七七年八・九上告棄却とう

・九上告棄却とうちづく日帝一ブルジョアジーの道ス黒い野望にたい

がしてはならぬことは、攻撃のな

かしかわれわがけつして見のが問われているときはない。十三

・一われわれは、「日帝の朝鮮侵略反革命を内戦へ!」「武装蜂起―プロレタリア独裁樹立の大道のもとに、

烽火

を内戦に転化せよ!」という真紅の國際主義のスローガンのもとに、非合法党建設のもとに、七・一七冲縄―「本土」労働者人民の熱い団結をいまこそうちたてよう。沖

繩―「本土」をつらぬく中央集権の成果を断固として発展させ、沖縄解放闘争の新たな飛躍を実現

「沖縄闘争の再生」をかけて前

せよ。ともにたたかわん!

10・21 有事立法粉碎

社共の「護憲平和闘争」と対決し

革命的大道さししめす

十・二一、昨秋革命的政治闘争の頂点をなすこのたたかいは、右から防衛論争―有事立法制定攻撃、「左」からの「平和・自主・独立の日本のための護憲闘争」という中間連合政府攻撃―ファシズム準備攻撃のまつだなかに、革命党と革命的プロレタリアートの任務を、しっかりととうちこんでたたかいぬかれた。「有事立法攻撃粉碎! 安保・沖縄・日韓闘争勝利!」のスローガンのもと、大阪桜の宮公園に結集した全関西のたかう労働者・学生は、秋期、「戦争と革命の時代」の本格的到来のなかでむかえんとする、日帝國家権力と、その追従者どもとの死闘にむけて、その最先頭を領導しぬくべくみずからと隊伍を武装し、政治警察機動隊の重包囲下、七八期闘争の大爆発をたからかに宣言した。

十・二一闘争の任務を次の四点と

してあきらかにした。

第一に、日帝の朝鮮侵略反革命遂行の急展開と対決し、八〇年安保闘争の巨大な突破口をきりひらく、安保・沖縄・日韓闘争の大前進をたたかいとること。第二に、有事立法攻撃を頂点にして中間連合政府―ファシズム準備攻撃としておこなわれる国民総動員体制の

幕とせよ! のスローガンをかかげて三里塚二期工区決戦に勝利すること、以上である。

第三に、部落解放闘争のブルジョア改良主義への歪曲とたたかい、ます強固なものへとうちかため東京高裁・四谷の再審却下策動を

第三に、部落解放闘争のブルジョア改良主義への歪曲とたたかい、ます強固なものへとうちかため東京高裁・四谷の再審却下策動を

第三に、部落解放闘争のブルジョア改良主義への歪曲とたたかい、ます強固なものへとうちかため東京高裁・四谷の再審却下策動を

第三に、部落解放闘争のブルジョア改良主義への歪曲とたたかい、ます強固なものへとうちかため東京高裁・四谷の再審却下策動を

第三に、部落解放闘争のブルジョア改良主義への歪曲とたたかい、ます強固なものへとうちかため東京高裁・四谷の再審却下策動を

第三に、部落解放闘争のブルジョア改良主義への歪曲とたたかい、ます強固なものへとうちかため東京高裁・四谷の再審却下策動を

第三に、部落解放闘争のブルジョア改良主義への歪曲とたたかい、ます強固なものへとうちかため東京高裁・四谷の再審却下策動を

第九回釜ヶ崎越冬闘争勝利

「下層」労働者たたかいと団結を強化し “釜ヶ崎解放”を蜂起—プロ独の大道へ？



闘争突入を宣言
(12月16日)

のできない存立条件たる産業予備
軍にくみこまれた釜ヶ崎二万労働
者のすべてにとって、これは他人
ごとではありえない。また、生活
苦・労働苦と失業の危機にさらさ
れつづけるすべての労働者・農漁
民・労動人民のあすの運命は、釜
ヶ崎、山谷、寿など「寄せ場」の
労働者たちの現実と無縁ではない。
えない。

釜ヶ崎の労働者にとって冬場は
まさに地獄である。年末年始には
仕事はぱったりととだえ、釜ヶ崎
の労働者は死との苦しいたたかい
の日々を強制される。ドヤ代もなく
青カン（野宿）する労働者がふ
く、年間数百人にのぼる釜ヶ崎の
「行路病死者」のおおくがこの冬
に集中している。かれらの死はけ
つして自然死なのではない。資本
主義によってもつとも苛酷な重労
働をしいられ、ただひとつの生き
る手段である肉体をズタズタにひ
きされ、使い捨てられて殺され
るのである。資本主義の欠くこと

のできない存立条件たる産業予備
軍にくみこまれた釜ヶ崎二万労働
者のすべてにとって、これは他人
ごとではありえない。また、生活
苦・労働苦と失業の危機にさらさ
れつづけるすべての労働者・農漁
民・労動人民のあすの運命は、釜
ヶ崎、山谷、寿など「寄せ場」の
労働者たちの現実と無縁ではない。
えない。

昨日十二月二十五日より開

始された。釜ヶ崎労働

者を完全な無権利状態
におとしこめている資
本、行政、警察権力と

たたかい、労働者の經
済的・民主主義的要求
をかちとつて労働者の
闘争能力をたかめあげ、
いっさいの災厄の根源

する戦列をうちかため
るべく反撃と闘争を準
備しよう。

日本帝国主義を打倒
する戦列をうちかため
るべく反撃と闘争を準
備しよう。

日本資本主義の底辺
をささえ、極度の貧困
と差別抑圧のもとにお
かれることによって、
労働者総体への差別分

断支配の基底をなす釜
ヶ崎の現実のただなか
から、われわれは釜ヶ
崎労働者とともに、革
命的政治的決起をつく
りあげなければならな
い。越冬闘争は、肉体
と生活の防衛の場であ
るだけなく、労働者

の団結と反撃を組織す
る戦場である。日帝の
侵略反革命戦争とファ

う超過利潤のわけまえの要求が、
きらかにしたい。

部落解放運動の発展を！」「再審
闘争勝利／石川氏奪還！」をたか
らかにかかげたたかいぬいた。文
字どおり、権力問題を軸とした團
結が問われているのだ。排外主義
一融和主義者たちは、部落解放を
「人権と改良」にすりかえ、あろ
うことか、部落大衆に資本主義の
救済—新植民地主義支配とともに

下の「中間連合政府」攻撃のもと
にひきずりこまんとしている。こ
れら排外主義—融和主義との死闘
戦をきりひらかねばならない。わ
れわれはこのことをかけて十・三
一闘争をたたかいぬいたことを、
全國の労働者人民・部落大衆にあ

**巨万の団結で狭山
再審闘争の勝利を
かちとろう！**
(10・31明治公園)



シズム準備の政治攻撃と対決し、「
釜ヶ崎解放」を資本主義の打倒・根
絶にむかう、蜂起—プロレタリア独
裁の大道へと組織すること、そのよ
うな労働者の革命的団結の中核を建
設することこそ、釜ヶ崎における共
産主義者の基軸的任務である。

一部の右翼日和見主義党派はこれ
を否定し、政治闘争と経済闘争をす
るべく分離し、経済闘争組織内の「
左派」フランクション形成をもって、
自己を前衛と規定するといつまつた
くの日和見主義・追随主義をあらわ
している。われわれは、これらと
の断固たる闘争を堅持しなければな
らない。

すべてのたたかう労働者諸君！
真冬の寒風をつきやぶって、われわ
れとともに、第九回釜ヶ崎越冬闘争
に結集しよう。國家権力・行政によ
る公園使用禁止攻撃を粉碎し、基幹
・中小・未組織をつらぬく労働者の
戦闘的団結で、釜ヶ崎に赤々とした
新たなたたかいの炎を燃えあがらせ
よう。越冬闘争に勝利せよ！

烽 火

七八年三里塚闘争のいっさいの成果を、九年二期工事粉碎へ！七九年こそ、なんびとからも祝福されることなく全人民の憎悪のかでうぶ声をあげた侵略反革命軍事空港を、死へ追いこめ！

全国の同志、友人諸君！七九年三里塚をめぐるプロレタリアート人民の任務は、三・三〇開港を文字通り粉碎した三里塚闘争十三年の偉大な成果をさらに発展させ、第二期工事を粉碎することである。

日帝＝公団はたたかいの発展的持续に恐怖しつつ、みずから国家的威信をとりつくろわんと第二期工事の強行を決意し、そのための卑劣な策動を開始している。日帝＝公団は副総裁町田をして、二期工事建設の強行着工を公然と宣言せしめ、また「成田空港周辺農業振興策」と称し、「公団買収地の貸与、近代的農業経営、基盤整備」などのペテンをもつて農民の収奪—追放と、反対闘争破壊の攻撃をかけてきているのだ。

だがこれにたいし、反対同盟農民は二期工区敷地内の農民を先頭に団結をいつそううちかため不屈にたたかいぬいている。

同志友人諸君！七九年三里塚をめぐるかかる攻防は、疑いもなく五・二〇強行開港以降の敵日帝国家権力の三里塚闘争破壊、反対同盟壊滅攻撃との熾烈な攻防にはかならない。敵権力は三月開港阻止決戦の爆発によって開港延期へと迫りこまれたことに心底動搖し恐怖した。「内戦がはじまつた。もはや農民運動ではなく革命運動に転化した」と。そして成田治安法を頂点とした反対同盟農民と革命的左翼との分断攻撃をかけ、三里塚一帯を戒厳令下の「白色支配下」におかんとし、空港関連事業、農業振興策をつうじて反対同盟農民と闘争を包囲し、条件派育成をはかり、全体重をかけて第二期工事（横風用滑走路三千二百メートル、B滑走路二千五百メートル）区域をきりくずす攻撃にでてきたのである。

三里塚闘争はかかる攻撃にその最先端で対決してきた。流血の十三年のたたかいと、これをともににないぬいてきた先進的農民、革命的プロレタリアートは、いまこそ日帝ブルジョアジーとの「侵略反革命戦争とファシズム」への道か、蜂起—プロ独への道かをかけて隊伍をととのえ、全プロレタリア人民をひきいてたたかいぬかねばならぬ正念場に突入したのだ。

そしてまた日帝国家権力の攻撃の照準もこ

二期工区決戦へ全人民蜂起を

反帝戦線（全国委）三里塚現闘

こにある。彼らは三里塚闘争を破壊し、反対同盟とたたかう農民をおしつぶし空港をなにがなんでも完成せんとしている。そして、帝国主義—社会帝国主義の「中間連合政府」攻撃の下にこのたたかいを鎮静せしめんとしているのだ。

同志友人諸君！樹立すべき権力をめぐる社会帝国主義、右翼日和見主義との路線闘争をにないぬくことと結合してわれわれは、二期工区決戦をどのようなたたかいとして進めねばならないのか。第一に、空港完全粉碎—二期工区粉碎のたたかいを日帝の朝鮮侵略反革命と総対決する革命的政治闘争としてさらに戦武装しなくことである。成田戒厳立法をはじめとした三里塚闘争破壊攻撃との対決を、こんにちの有事立法攻撃、「日米共同対処行動指針（ガイドライン）」に象徴される八〇年安保攻撃—これらのもとに進行する朝鮮出兵、臨戦体制構築、内戦鎮圧攻撃との対決となりむすびつけてたたかわねばならない。

第二に「小さな人民

蜂起」の萌芽の発展をめぐる右翼日和見主義、急進民主主義との分岐

を闘争のるつぼのなかではつきりさしめすことである。三里塚現地においては反対同盟

決のなかで、労働運動ににおいては、三里塚レッドページ、統制処分

とのたたかいのなかで、きりくずし攻撃との対決のなかで、労働運動

を闘争へと進むべきだ、開始された新たな攻防の領導をめぐって激しい闘争がくりひろげられている。これを三里塚を頂点とする基地住民闘争への鎮静化攻撃、労働運動への産業報国会化攻撃という、「中間連合政府」攻撃との真正面からの対決へと發展させていかねばならない。第三に条件派との闘争を組織し二期工区決戦の勝利へむけ、革命的プロレタリアートとかたく結合し



北総の台地に三里塚闘争は健在である
軍事空港建設に敢然とたちはだかれ！

た先進的農民の新たな団結を三里塚闘争のただなかに断固としてたたかることである。すべての同志友人諸君！二期工区決戦はすでにはじまっている。强行開港を既成事実化し、関連事業—農業振興策により反対同盟とたたかう農民の外堀をうめ、条件派を育成して、飛行阻止、空港完全粉碎、二期工事実力阻止の戦列をうち固め、日本階級闘争の革命的飛躍をきりひらく全国労働者人民の総決起を準備せよ！その烈火のなかで、『革命の伝導路』を建設せよ！

七九年、わが反帝戦線（全国委）三里塚現闘団は、その激闘の最前線にならう意志をかたくしている。共に隊伍をくみ、勝利の日へとむかうわれわれの団結をうちかためよう。全プロレタリア人民は、三里塚闘争に総決起せよ！三・二五全国総決起現地闘争に総力あげて結集し、二期工区決戦に勝利せよ！

1979年1月1日

CTS建設を実力で阻止せよ

仲間たち！

朝鮮侵略反革命戦争への道をつきすすむ日帝の攻撃のもと、沖縄は、琉球処分以来百年の差別抑圧の歴史のうえにいま、侵略反革命前線基地の島として日夜強化されつつある。

県道を封鎖しての米軍による実弾砲撃訓練、朝鮮での山岳戦を想定した戦車道建設、あいつぐ誤爆・誤射・墜落事故。一方における自衛隊も、十月、大規模な総合訓練をおこない、とくに那覇民間空港と滑走路を共同使用する航空自衛隊の訓練による民間ダイヤの大混乱などが発生しており、まさに沖縄は、「有事立法」が先取り的に実践されているのだ。そして日米帝の沖縄基地強化はCTS（石油備蓄基地）の沖縄、奄美への集中攻撃と緊密にむすびついている。基地への軍事燃料供給とともに、「本土」とアジア・アラブの中継拠点として、沖縄への集中がなされているのだ。

そしてこれら基地強化を軸に、沖縄人民を侵されている。すなわち、海洋博、皇太子上陸、交通変更など一連の「返還」攻撃の総しあげをもって、「反基地・反大和・反天皇」たる略反革命戦争へと動員せんとする攻撃がかけられている。さらに、沖縄人意識の変質と反革命的糾合がもくろまれ、さらには反戦地主会解体攻撃や軍労働者の大量解雇、農漁民の「本土」へのたたき出しをもつてする反基地勢力の解体がなされようとしている。

この過酷な日帝の沖縄支配にたいし、社共二社帝潮流は、中間連合政府―「革新自治体」の幻想のもとに沖縄のプロレタリアート人民に武装解除を強要し、「革新自治体」による基地周辺整備資金導入、CTS設置認可、県職労組下のゆうな学園分会への分会づぶし攻撃など、ブルジョアジーとその国家の守護神

すべてのたたかう労働者、農漁民、学生のとしてたちあらわれているのだ。

このよう、帝・社帝の攻撃のなかで沖縄労働者人民のたたかいは、社共をけちらして飛躍をかちとりつつある。昨秋期CTS決戦においては、社共の十二月知事戦を理由にし、た闘争封殺をはねのけ、十一・四総決起大会、十一・十一と十二・十七の二つの屋慶名現地

行動が、文字通り連續闘争として「日本帝国主義との総力対決としてCTSを阻止せよ！」をかかげ、四〇〇のヘルメットで武装した革命的労働者、金武湾を守る会農漁民の結集でたたかいぬかれたのである。とりわけ十一・十一闘争においては、デモ隊と呼応して工事現場を黒煙で包む創意的・果敢な闘いが遂行され、工事車輛はストップし、三菱と機動隊をかかげ、四〇〇のヘルメットで武装した革

命的労働者、金武湾を守る会農漁民の結集でたたかいぬかれたのである。とりわけ十一・十一闘争においては、デモ隊と呼応して工事現場を黒煙で包む創意的・果敢な闘いが遂行され、工事車輛はストップし、三菱と機動隊を右往左往させたのである。さらに十二・一七闘争においては、知事選敗北にうちしおれる社共の完全逃亡を粉砕し、工事現場を十重二十重に警備する機動隊の壁を肉弾で突破するたたかいがかちとられた。同時に、労働運動内の先進的部分においても、社共による「

雇用攻撃への反撃闘争など、中小民間労働者をふくめた、全島的規模での権力・資本との持続的たたかいが燃えひろがっているのである。沖縄階級闘争のさらなる発展をかちとるために、たたかう沖縄の労働者・農漁民はさらに団結をつよめ、武装をつよめ、社会帝國主義・右翼日和見主義・急進民主主義の影響から自己をときはなち、わが中央集権非合法党に結集し、「武装せる革命の伝導路」の建設にたちあがらねばならない。

右翼日和見主義・四トロは、「反CTS政治攻勢の力で知事選に介入せよ」と中間連合政府派の尖兵として純化している。また革マル派は、反スター国主義と組合主義の立場から、日帝の侵略反革命を否定し、排外主義攻撃に屈服し、小ブル反戦闘争を叫ぶことによって自國帝国主義・日帝打倒の任務に、逃亡・敵対をつよめている。

一方、「自決派」については、「本土」―沖縄の差別抑圧関係のなかにのみ沖縄支配の現実を皮相化し、現代過渡期世界における国際主義に武装された沖縄解放闘争の革命的任務に敵対している。これら右翼日和見主義にたいし、戦闘的位置をもつ急進民主主義中核派は、反スターリズム・一国主義を純化させ、社帝との路線的対決なき暴動の延長上に権力奪取を夢想するという暴動革命路線と、「沖縄奪還綱領」の全面的破産を白日のもとにさらけだしている。

すべてのたたかう労働者人民諸君！日和見主義との党派闘争を完遂し、「本土」―沖縄つらぬくプロ独立権力の樹立にむけ、安保・沖縄闘争の大爆発をかちとろう。七五年七・一七海洋博粉碎・皇太子上陸阻止闘争をうけつけ、すでに突入したCTS決戦のまつただなかに、侵略反革命を内戦への国際主義で武装した革命的政治闘争を創出しよう。すべての労働者・農漁民は反帝戦線（全国委）に結集せよ。

われわれは本七九年をかかるたたかいの最前衛にたってたたかいぬく決意である。反帝戦線（全国委）沖縄地方委員会とともに七九CTS決戦に勝利せよ！

屋慶名現地闘争を貫徹す

(78年11・11)

